『狗張子』注釈（五）

江本　裕　編

本注釈は、「『狗張子』注釈（一）・（二）・（三）・（四）」（『大妻女子大学紀要――文系――』31・32・33・37、平成11年3月・平成12年3月・平成13年3月年・平成17年3月）に続くものである。大妻女子大学大学院（修士・博士課程）の近世専攻の院生を中心に輪読してきたものを基にしたもので、今号のメンバーは市毛舞子（博士課程二年、巻六の一・巻六の二・巻七の二担当）、松岡翠（博士課程一年、巻六の二・巻七の三）、飯野朋美（修士課程二年、巻六の一・巻六の三・巻七の一）、本澤郁枝（修士二年、巻六の一）、阿部紘子（修士課程一年、巻六の五・巻七の五）、工藤由紀（修士一年、巻六の五・巻七の六）、錦木恵（修士課程一年、巻七の一）、山崎由芙（修士一年、巻六の四・巻七の四）の八名である。各人の礎稿を討議し、最終的に江本が閲読した。従って最終的な文責は江本にある。

なお、目録は巻頭部に総目録（第一～七巻）が付されているが、今回は第六・巻七のみを載せた。

凡　例

一　底本には、便宜、大妻女子大学所蔵の後印本を用いた。

一　校訂にあたっては、原本の面目をできる限り保てるようにつとめたが、通読の便を考慮して、次の方針に従った。

イ　本文に適宜段落を設けた。

ロ　句読点は極力原文の調子を生かすようつとめたが、若干私に改めたところもある。

ハ　漢字については、常用漢字表にあるものは、原則として現在通用の字体に改めた。残した略体字・異体字のうち、必要と思われるものには後注に典拠を示した。その際『節用集』『下学集』等の古辞書を利用した。

ニ　仮名遣い・漢字の振り仮名は原文の通りにし、著しく通則からはずれているものは後注に記した。また、原文には無いが必要と思われる振り仮名を〈　〉に入れて補い、左訓は当該字の下に［　］を施して入れた。

ホ　仮名の清濁は私に補正した。

ヘ　誤字・誤刻・衍字と認められるものも原文通りに示し、後注でその旨を示した。

ト　挿絵は省略した。

一　後注は簡略を旨とした。なお、後注の引用文はよみやすい便を図り原表記に従っていないところがある。

一　イ　出典の略称

イ　節用集は原則として「易林本」「書言字考」等とした。

ロ　その他の資料は各話の初出箇所で正式名称を記し、以後は適宜略称を用いた。

一　末尾に既出の出典を記し、他に気づいたものがあった場合はこれを加えた。なお、中国の作品で、典拠と指摘されるものに限り、簡単な粗筋を付した。本文における略称の詳細は以下の通りである。

〈山　口〉…山口剛『怪談名作集』（『日本名著全集』日本名著全集刊行会、昭和2・10）解説。

〈麻　生〉…麻生磯次『江戸文学と支那文学』（三省堂、昭和21・8）初出（再版以後『江戸文学と中国文学』と改題）。

〈冨士1〉…冨士昭雄「浅井了意の方法――狗張子の典拠を中心に――」（『名古屋大学教育学部紀要』昭和42・3）。

〈冨士2〉…冨士昭雄「伽婢子と狗張子」（『国語と国文学』昭和46・10）。

〈冨士3〉…冨士昭雄『『狗張子』典拠続考」（『日中語文交渉史論叢』桜楓社、昭和54・4）。

〈江　本〉…江本裕「了意怪異談の素材と方法」（『近世前期小説の研究』若草書房、平成12）。

第六巻

塩田平九郎怪異を見る事

藤の杜彦八が子天狗道物語の事

板垣信形討死付天狗奇特を現す事

松岡四郎左衛門が亡魂八幡に鎮祭る事

杉田彦左衛門天狗に殺さるゝ事

狗はりこ巻之六

○塩田平九郎怪異を見る

＊摂州＊花隈の城主＊荒木摂津守は、＊織田信長公に楯づきしかば、＊滝川左近将監に人数をさしそへ責させらる。＊野村丹後守を初めて、＊雑賀の者ども二百余人みなうたれて、城には火をかけ焼くづしけり。＊塩田平九郎といふもの、只一人のがれ出て故郷に帰り、暫らく世の有さまをうかゞひ見るに、行すゑとても頼みがたく、＊兎にもかくにもはてしなき身を、いたづらになさんよりは後世の大事をもとめばやと思ひさだめ、もとゞりきり＊衣をすみにそめ家を出つゝ、心のおもむくかた、足にまかせて＊野くれ山くれ村里をめぐり、国々の風俗所々の有さま、聞つたへし名所旧跡、おがまぬ霊地もなし。

又そのあひだに富てゆたかなるあり、わびてすむ人もあり、はしたなき、情ふかき、いづれしなゝ〳〵ひとしからず。或時は＊たつきもしらぬ山中をたどり、＊樵に麓の道を尋ね、或時はそこともわかぬ野べにまよふて草かりに里をもとめ、又はすみか稀なる＊長路に＊日を暮し、宿かさぬ所に行かゝりては、木のもと＊塚原に夜をあかし、筑紫がた＊肥後の国＊阿蘇の＊深谷にいたりしかば、まのあたりなる地ごくのありさま、もえのぼる＊焔のすゑ、＊煙につれて天を焦し、鳴くだるいかづちの音、山も更にくづるゝがごとし。罪人のよばひさけぶ声谷の底に聞えて、いく千万とも知べからず。かゝる事を見てもおそれず、聞てもおどろかずは、誰とてもかくあるべしと、懺悔の涙は留めがたし。

げにすつる身なればこそ、かやうの事を見聞につけて思ひ知かなと、ひとり心に＊観じて、それより猶ゆく道の末はるかなる薩摩がた、＊硫黄が嶋にわたりて、＊俊寛か古しへこの嶋に流されて、あはれをのこす物がたりを、今見るやうにぞ思はるゝ。＊浦半の＊海士のしわざとて、釣舟に棹さして＊千尋の浪にたゞよひて、日も夕暮のよび声

は＊遠近に聞えて、うしほをはこび柴をとり、塩やく煙の心ぼそく、＊玉藻を拾ひ＊磯菜をとり、＊世わたる業はいづくとても、安からぬこそ物うけれ。

四国＊二嶋のあひだをめぐりて、やう〳〵播磨がた＊しかまの＊かち路を経て、又故里に帰り、指を折てかぞふるに、＊十八年にぞ成たる。変りゆく世の中に知人もなく、村里のすみかも、そこともしらずあらたまりつゝ、花隈・＊伊丹の焼跡、こゝは昔の城の跡、あかしもあらずみえければ、そゞろに哀れにおぼえて、

＊かへりこぬ昔をおもふ袂には　秋ともなしに露ぞをきける

日も夕暮になり、野寺の鐘の声かすかに聞えしかば、

＊見るまゝに過にしかたは入逢の　鐘や昔の跡に聞ゆる

かくて花隈のかたをあゆみゆくに、心のまゝに荒はて、＊荊浅茅の生茂り、＊薄がもとに秋をわぶる虫の声々もあはれなり。四方の山々いたく暮はてゝ、又問よるべきよすがもなし。草原の中に、ふるき＊軒ばの有けるに入たりければ、すむ人もなし。軒かたぶき板戸破れ、＊上漏下湿て浅ましげなるに、うづくまり居て静に経よみ念仏す。月漸やく東の山のはに出る比、誰とはしらず三人つれて入来る。平九郎入道思ひかけず、壁にそふてひそかに見れば、そのさまいやしからず物語する事、又世の愚俗にはかはりて、理はりにかなへり。

その中に一人云やう、さても此世の中＊大永＊天文の比より、諸国たがひにそばだち、つよきは弱きをしたがへ、大なるは小さきを并せ、天下すでに＊四分五裂して軍の絶る時なし。此あひだ＊甲斐国には＊武田信玄、＊北越には＊長尾謙信、北条織田の家々、人数をあつめ謀ことをたくみにし、ひたすら＊戦国の七雄、＊三国の乱れといふとも今の時にはよもまさらじ。いつか＊一統の世と成べきといふ。

また一人の云やう、天下の＊治乱は＊時運の変災天地の妖怪なり。或は飢饉あるひは＊疫癘の＊天行事も、みな此たぐひなり。時いたり道さだまりて、徳たかくおこなひよき人の手にころび入て、天下は一統すべし。そのあひだに家をとりたて、党を結び＊軍兵をまねきて、＊地をあらそふ人あれども、＊天理にかなはずしては、＊中比亡びて絶るもあり。まことに吉凶は、天理に依て＊人事にあらず。されば信玄、＊謙信、＊北条の氏康は、みな他界せられ、世つぎは有ながら、いづれも父には似ずとかや。中にも＊武田四郎勝頼は、＊武勇は諸家にすぐれたれども、＊愚闇にして才智に＊ともしく、みづから武勇に慢して、諸方の敵をば生たる虫かとも思はれぬは、やがて亡びの＊もとひならずや。一端は大将の＊武威つよく、敵に勝事あれども、愚にして智恵なく、或は敵の謀ことにのせられ、又は奢をこのみ人を見しらず、或は＊佞奸軽薄の者を好とおもひ出頭させ、＊智謀ふかき臣を＊讒して疎み遠ざけ、我が武勇に慢をおこし、我意にまかせてすまじき軍をして、味方のよき者皆打ほされ、いくほどなく国を失なひ身を亡ぼす事、古今に例おほし。

＊天正年中＊奥平美作守同しく子息＊九八郎、＊勝頼の行跡を見限り、甲府を背きて＊長篠の城に楯ごもる。武田勝頼大に怒て、一万八千よ騎を率して押よせらる。徳川家＊後詰のため、信長公に加勢をこふて、前後七万六千よ騎長篠におもむき、三重に柵をかまへて待かけらる。勝頼一万四千よ騎、先陣＊山県三郎兵衛を初めて三重の柵に防がれ、三千挺の鉄炮に的になりて打ころされしかは、一族同心にいたるまで一万三千余人死けれども、敵方には名ある侍は一人もうたれず、勝頼は只三騎にてのがれて甲府に帰らる。

此後は織田・徳川両家の武威の天下にかゝやきて、出る日のごとく、武田がた諸方の塁に取かけ＊責おとせども、後詰すべき人数もとゝのはず、すてころさるゝ故に武田の家衰ろへ、末久しくは有へからずと思はぬ人はなし。つゐに信長公のために責られて、＊天目山のふもとにして、武田の一家みな死絶しこそ哀れなれ。

凡＊軍は三才相応するをもつて要とす。天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかずといへり。勝頼此たびの出陣には、＊往亡日にあたれり。徳もなく義もなく、智謀くらき上に、血気の勇にまかせて時日をえらはず、父信玄は軍を大事にかけ、＊山本勘助が＊丸日

取、＊前原筑前守が相伝せし月切の日取、＊小笠原源与斎が＊八方懸の口伝、いつれも秘術の大事なりとて、丸日取の図を＊軍謀団の裏に書てもたれたりとそや。こと更五月は中夏にして南のかたに旺す。廿一日は辰巳午の三時に、破軍の劔鋒北のかた、或は艮のかたにむかふ。然るに勝頼の陣、南にむかふて備をたて、しかも辰巳午に軍を初めたる。みなこれ天の時に違へり。其上長篠の城に取かけ、本陣を＊道虚山に取たり、＊道虚日はよろづに忌事なり。名詮自性の理り、いまだ戦かはざるに敗北の兆あり、天の時を失なはれたり。信長方わざと広みを前にあて、＊切田堀切片折なる＊殺所を残し、柵を三重にふりけるは、勝頼を小曳て川を渡させんがためなり。待て戦かふべき所ぞかし。＊斥候をも出さず、無理に懸りて軍せしは、地の利にそむけり。其上、去年東美濃はつかうの時より簇本外様近習衆と諸牢人方信濃衆と、三方の内証不和になり、＊長坂釣閑と＊内藤修理と中あしくなり、勝頼は家老方を悪み思へり。内外大に＊はだ〳〵になる、軍事の評定にしまりなし。それに＊強み過たる大将を釣閑＊かうばりして、家老の諫を＊讒申せし。国の大なるを恃み、人数のおほきにほこり、武威をあらはさんとする、これ家運のかたふきたると見て、家老諸侍はみな打死せしもの成べし。其時の落書に、

＊信玄の跡をやう〳〵四郎殿　敵の勝頼名をばながしの

此後またいかならん世に、うつり行べきもしらずと語りければ、又一人の云やう、無用の永物がたり、余所の盛衰はさればいかにもあれかし、めん〳〵身の上の事、行すゑこそあやしけれといふ。まことに我らの事を忘れて、よしなき物かたりせんより、心をのべて慰むにはしかじとて、其中に色白くおもて丸やかなるが、一篇をぞ吟じける。

＊高低　豎起　孤輪月　扇動　縦横　興二涼　風一
弄　罷委棄　埋二湿土一　爛皮腐骨故情　窮

又一人、その身ほそやかにおもてにえくぼあり。吟じけること葉に、

一曲非声　渉二碧　霄一
＊当時得意龍吟　調　方　慕　穿レ林　舞　謡　嬌
今日庭中破砕竹

又一人、その躰肥ふとりて長ひきく、髪髭垂乱れたるが、吟詠していはく、

＊荐　掃二埃　塵一更　靡レ　遑　愁懐　疲　羸　鬚髯　喪
如一今　憔悴　荒　村　客　衰朽　玲　姘　倚二短一　墻一

かやうに打吟して、此心をのぶる楽しみは、千とせ過るとも忘れじといふてあそびたはふるゝを、平九郎入道つく〴〵と聞て、いかさまにも懐旧の心ばせあり。詩の心もこと葉たゞしからず、故あるものどもなるべしと思ひて、身をつくろひて一声念仏しけるに、三人ながらともし火とともに、雪のごとくきえうせたり。

夜もはや明がたに成しかば、ふしぎの事に思ひて、あばら屋を立出つゝあたりちかき人の家にゆきて、此あばらやにはあやしき事はなきかと問に、その家は人のすむにもあらず。あれはてたるに、折々は人の声聞えて、わらひどよめく事侍べり。定て狐狸のわざかと思ひ侍べる、あたりの家にけしかるわざをいたすにもあらずとかたる。平九郎入道聞て、われは諸国行脚の僧なり。こゝにめぐり来て日暮しかば、かりそめに此あばらやに入て、夜をあかさんとせしに、かう〳〵の事あり。めん〳〵一首の詩をつくる、そのこと葉すぐれたるには侍へらねど一篇の心ばせこそあやしく聞なし侍へりとて、あるじの男其外若き者どもをかたらひ、あばらやの内をさがしけるに、破れたる団と破たる笛とちいさき帚木と、まことに古きが土にうづもれ、塵にまみれてありしを、これらの＊精魅のあらはれ出たる物なるべし、詩の心も是にて聞え侍へり。されどもこれを焼すつる事はあるべからずとて、三色のものを他所の山ぎはにひとつに埋みけり。それより後はあやしき事もなかりしと也。

○**摂州**　現在の大阪府の一部と、兵庫県の一部。○**花隈**　花熊城。現在の兵庫県神戸市中央区花隈。永禄十年（一五六七）に織田信長の命によって荒木村重が家臣野口与一兵衛を奉行として一か年の短期間に築いたと一般的にはいわれているが、その時期には信長はまだ入京し

ておらず、この地方に力を及ぼす状況になかった。翌十一年十月に摂津を和田惟政に与えた時に築かれたか、天正二年（一五七四）に信長が摂津を席巻した時に大阪の石山本願寺と毛利氏の連続を断つために荒木村重に命じて築かせたのか、どちらかではないかと考えられる（『日本城郭大系』12）。○**荒木摂津守**　荒木村重。天文五年～天正一四年（一五三六～一五八六）。安土桃山時代の武将。荒木氏は丹波国多紀郡八上城（篠山町）にいた波多野氏の一族といわれる。小身のもので牢人（浪人）していたが、荒木村高の代、天文・弘治（一五三二～五七）のころ北摂豊島郡池田にいる池田勝正につかえた（中略）。信長の入京後池田勝正は信長にくだり旧領の領有を認められたので、高村の子荒木村重は勝正の郎等として信長のために働くこととなった（中略）。かれにとって大きな転機は天正二年（一五七四）の十一月におとずれる。それに先立ちこの年、村重は旧主池田勝正を攻めて勝正を高野山に落ちのびさせ、その家臣の多くを配下に入れ池田を併有した。ついで十一月十五日信長の命によって伊丹城にいる伊丹親興を攻め伊丹城をおとしいれた。（中略）荒木が入城した伊丹城は信長の命によって有岡城と改められ、村重は摂津の大名になり上がった。村重は天正六年七月の別所攻めのときまで、羽柴秀吉とともに信長軍の主力をなして活躍してきた。ところがその彼について、秋になると、信長に対して異心があるとのうわさが流れはじめた。十一月九日信長はいよいよ摂津おもてへ出馬する。信長の軍は有岡城包囲の態勢のまま年を越して天正七年（一五七九）を迎える。九月二日夜、村重は女子供を有岡城においたまま、わがみのみ五、六人を召しつれて城を脱出し、嫡子村次のいる尼崎城にはいった。（中略）十二月、村重は尼崎城をものがれて華熊城に入っている。（中略）荒木はここを脱出し、毛利氏のもとに亡命したのである。亡命後かれは入道して道薫と称し尾道にいたが、信長の死後茶の湯をもって秀吉に仕えた（『伊丹市史』）。「九月二日の夜　荒木摂津守　五六人召列伊丹を忍出　尼崎へ移候」（『信長公記』一二）。○**織田信長公**　既出。巻一―三。五―一。天文三年～天正一〇年（一五三四～一五八二）。戦国・安土桃山時代の武将。天正六年（一五七八）、荒木村重を有岡城に攻囲し、高山友祥（右近）・中川清秀を降伏させる。○**滝川左近将監**　滝川一益。安土桃山時代の武将。信長に仕え、永禄年間にして一軍の将となっている。本能寺の変の後に開かれた清洲会議に遅れたため、織田家宿老の列から漏れてしまった。柴田勝家の自害、信孝の自刃の後、降伏（織田信長家臣人名辞典）。○**野村丹後守**　?～天正七年（?～一五七九）。荒木村重の妹婿で、荒木家重臣の一人。有岡城籠城の際、鵯塚にあった出城を守る野村丹後は、守兵がことごとく討死したため信長軍にわびを申し入れた。しかし聞き入れられずに首をはねられてしまった（『伊丹市史』）。「十月十五日　滝川左近　以調略　滝川人数引入余多切捨候取物不取敢上を下へとなつて城中へ逃入親子兄弟をうたせ泣かしむ計也……野村丹後　為大将雑賀之者相加拘候悉討死にて丹後御詫言申候処中〳〵無御許容生害候てくびを安土へ進上候」（『信長公記』一二）。○**雑賀**　雑賀庄。南は和歌浦辺り、東は和歌川辺りを限る現和歌山市街地と、紀ノ川北岸の一部が庄域であったと考えられる。戦国期当地一帯には雑賀一揆が成立した（『和歌山県の地名』日本歴史地名大系31）。○**塩田平九郎**　未詳。○**兎にもかくにも**　何にせよ。○**衣をすみにそめ**　出家して。○**野くれ山くれ**　野で日を暮し、山で日を暮し。長い旅路をいう語。○**たつき**　手がかり、手段。○**樵**「樵　キコリ」（倭玉篇）。○**長路**　ナガヂの訓み未確認。○**日を暮し**　一日を暮らす意。○**塚原**　墓などのある野原。○**肥後の国**　現在の熊本県。○**阿蘇**　阿蘇山。九州のほぼ中央に位置する複式火山で、霧島火山帯に属する活火山。阿蘇神社には奉幣などの神事とともに、読経などの仏教的行事が神前で膝行され、度者・僧徒が置かれて仏教的儀式を取扱うこととなった。山上の現在の古坊中には寺坊が創始され、神霊池を対象とする祈祷や仏寺勤修に従事した。山上の坊は天正年中（一五七三～九二）大友・島津両氏の確執の影響を受けて衰え、同一五年退転したが、加藤清正の入国後慶長四年（一五九九）阿蘇山のふ

もと黒川村（現阿蘇町）に坊舎を再興し、古坊中に対し麓坊中とよんだ。阿蘇氏は神主で武将でもあり、阿蘇神社は肥後一宮である（『熊本県の地名』日本歴史地名大系44）。○**深谷**　「Mitani　ミタニ」（日葡）。○**焔**　「焔　ホノホ」（色葉字類抄）。○**煙**　「煙　ケフリ」（倭玉篇）。○**観じて**　静かに思考して仏理を悟って。○**硫黄が嶋**　硫黄島。現在の鹿児島県鹿児島郡三島村硫黄島。古代以来、記録・物語類にみえる貴海島・鬼界島などは硫黄島にあたるとする説がある。中世には流刑地・硫黄産出地として知られていた。『平家物語』巻二は治承元年（一一七七）俊寛・平康頼・藤原成経の配流地を「薩摩潟鬼界が島」とし、延慶本『平家物語』は配流地の鬼界島を島のなかに火山島があり、硫黄を産するので油黄島と名付けられたとしている（『鹿児島県の地名』日本歴史地名大系49）。○**俊寛**　生没年不詳。平安末期の真言宗の僧。後白河院の近臣。治承元年（一一七七）、藤原成親らと鹿ヶ谷の山荘で後白河院を擁して平氏を討伐する謀議を企てたが、発覚し、鬼界ヶ島に流された。その波乱にとんだ生涯は謡曲・浄瑠璃・歌舞伎などに文芸化され後世に広く伝えられた。○**浦半**　ウラハの訓み未確認。○**海士**　海辺に住んで漁業に従事している人。漁師。「海士アマ」（饅頭屋本・易林本）。○**千尋**　深い海。○**遠近**　「遠近　ヲチコチ」（諸節用集）。○**玉藻**　藻の美称。○**磯菜**　磯辺に生えている食用となる植物。海藻の類。○**世わたる業**　暮らしを立ててゆく方法。○**二嶋**　小豆島と淡路島。○**しかま**　飾磨。現在の兵庫県姫路市。○**かち路**　徒歩で行く道。また、歩いて行くこと。○**十八年にぞ成たる**　村重の花熊城脱出が天正八年（一五八〇）。十八年後は慶長三年（一五九八）。○**伊丹**　伊丹城。現在の兵庫県伊丹市伊丹・宮ノ前・中央。伊丹氏が居城した城。戦国大名をして「伊丹は堅固なり」といわせた程、防備の厳重な城で、西摂津の要としての役目を充分に果たしていた。天正二年（一五七四）十一月、荒木村重は伊丹城に攻め寄せて伊丹氏を滅ぼし、入城。ただちに新しい城造りに着手し、城名を有岡城と改めた（『日本城郭大系』12）。○**かへりこぬ…**　（歌意…戻ってこない過ぎ去った時を思い出していると、袂には秋でもないのに露が降りているなあ）○**見るまゝに…**　（歌意…見渡していると時が過ぎた場所には、暮れ方につく寺の鐘の音が昔の城跡に聞こえ、昔あったことが思い出される）○**荊**　「荊　ムハラ」（色葉字類抄）。○**薄**　「薄　スヽキ」（諸節用集）。○**軒ば**　軒のはし。○**上漏下湿て**　雨漏りがして床は濡れて。「濕衣　ヌレギヌ　湿又作濡」（易林本）。○**大永**　年号。一五二一～一五二八。大永元年（一五二一）、足利義稙出奔。足利義晴上洛。義晴に将軍宣下。同七年（一五二七）、近江坂本に徳政一揆蜂起。○**天文**　年号。一五三二～一五五五。天文年間、一向一揆相次ぐ。天文四年（一五三五）、北条氏綱と今川氏輝、武田信虎を甲斐に破る。同五年（一五三六）、天文法華の乱。同六年（一五三七）、北条氏綱、駿河に侵入。同八年（一五三九）、幕府、徳政停止。同一〇年（一五四一）、武田晴信、父信虎を駿河の今川義元の許に追放。○**四分五裂**　秩序なくさけ分かれること。○**甲斐国**　現在の山梨県。○**武田信玄**　既出。巻一―三。四―三。五―一。五―二。大永元年～天正元年（一五二一～一五七三）。戦国時代の武将。信虎の長子。名は春信。信玄は法名。上洛を志し、織田信長と雌雄を決しようとして三河の野田城攻囲中に病を得、伊那郡駒場に没。○**北越**　越の国の北部。一般に越中国と越後国を指すが、主として越後をいう。○**長尾謙信**　既出。巻一―六。五―二。享禄三年～天正六年（一五三〇～一五七八）。戦国時代の武将。長尾為景の子。上杉憲政から上杉氏の名跡と関東管領を譲られ、政虎と改名。のち輝虎と改め、剃髪して不識庵謙信と号。しばしば小田原北条氏および武田信玄と戦った。○**戦国の七雄**　周の晩期に覇を競った韓・魏・趙・斉・燕・楚・秦。○**三国の乱れ**　中国で、後漢滅亡後、魏・呉・蜀の三国が互いに対立したこと。○**一統**　天下を統一すること。○**治乱**　世が乱れること。○**時運**　時の成り行き。○**疫癘**　悪性の流行病。○**天行**　「天行赤眼　ハヤリメ」（合類）。「天行眼　ハヤリメ」（書言字考）。○**軍兵**　既出。巻五―二。「軍兵　グンビヤウ」（諸節用集）。○**地をあらそふ**　領土を自分のもの

にしようと競う。○**天理**　人為でない天の正しい道理。○**中比**　二つの時期に挟まれた中間。「中比　ナカゴロ」（易林本）。○**人事**　ニンジの訓み、未確認。○**謙**　原文のまま。「謙信」とあるべきところ。○**北条の氏康**　既出。巻一―三。永正三年～元亀二年（一五一五～一五七一）。戦国時代の武将。氏綱の長子。古河城を陥れて古河公方足利晴氏を相模に移し、上杉謙信と戦って北武蔵に勢力を伸ばす。民政にも力を注ぎ後北条氏の全盛を築く。○**武田四郎勝頼**　既出。巻三―三、巻四―一。天文一五年～天正一〇年（一五四六～一五八二）。戦国・安土時代の武将。信玄の子。父の没後家を嗣いだが、長篠の敗戦後は勢い振るわず、織田・徳川の軍に撃破され、天目山の麓で自刃。○**武勇**　既出。巻一―三。武術に優れ、勇気があること。「武勇　ブヨウ」（饅頭屋本）。○**愚闇**　おろかで、ものの道理にくらいこと。○**ともしく**　欠乏しているさま。「乏　トモシ」（易林本）。○**もとひ**　原因。○**武威**　名のあらわれた武士の意気。「Bu-i　ブイ」（日葡）。○**佞奸**　既出。巻一―三。権力者にへつらう人。○**智謀**　知恵深いはかりごと。○**讒して**　事実でない他人の悪口を上長に告げ口して、その人を陥れようとして。○**天正年中**　一五七三年～九二年。「天正三（乙亥）年、武田勝頼父信玄遺命に任せ、今年葬祭を執行後、二万五千の兵を率して、遠州平山を越え、三州宇理に至る。四月二十一日、長篠城を取囲む。城には奥平信昌（九八郎）、松平伊昌（外記）楯籠る」（『武家事紀』）。○**奥平美作守**　奥平貞能。三河・遠江・信濃の戦国大名の勢力が相接する地に割拠していたが、貞能は、永禄十一年今川氏を離れて徳川氏に属し、一度武田氏に属した後、同十二年四月再度徳川氏に服した。天正元年（一五七三）家康は、起請文を貞能・信昌父子に送り、娘亀姫と信昌との縁組などを約し、武田勢に対して格別にこの家を重視した（国史大辞典）。○**九八郎**　奥平信昌。一五五五～一六一五。美濃国加納藩藩主。通称は九八郎、初名は定昌。奥平美作守貞能の子。母は牧野出羽守成種の女。弘治元年（一五五五）三河に生まれた。天正三年（一五七五）の長篠の戦では、武田勝頼の大軍に包囲された三河の長篠城を固守して、織田・徳川軍大勝の起因を作った。慶長六年三月、美濃の加納十万石に転じたが、同地において元和元年（一六一五）三月十四日没。妻は家康の娘亀姫（国史大辞典）。○**長篠の城**　現愛知県南設楽軍鳳来町。永正五年（一五〇八）創設。往古から三河と遠江・信濃や美濃地方との交通の要衝地であった。天正元年（一五七三）、徳川家康が長篠攻略を始め、同年奥平信昌が城将の時、武田勝頼の来攻をうけ、ここに長篠城攻防戦から設楽ヶ原の織田・徳川連合との一大合戦となった（日本城郭大系）。○**後詰**　後に控えて応援すること。あとおし。○**山県三郎兵衛**　山県昌景。？～天正三年（一五七五年）。戦国時代の武将。甲斐武田信玄の家臣。はじめ飯富源三郎といい、飯富虎昌の弟。信玄の近習・使番を経て譜代家老衆三百騎持の隊将となる。永禄八年（一五六五）、兄虎昌の誅殺後に山県姓に改める。原昌胤とともに両職を勤め、駿河江尻城代。天正三年（一五七五）五月、三河長篠の戦いで勝頼に従い、戦死する（戦国人名事典）。「山県三郎兵衛尉昌景、初名は飯富源四郎、兵部少輔が弟、美濃国土岐家の士なり。三郎兵衛と号し、信玄に近侍し度々の戦功、信玄の感書二つ、この外五度の頸数あり。兄兵部少輔逆心の後、氏を改めて山県と号し、五百騎の大将として駿州江尻の城主たり」（『武家事紀』）。○**責おとせども**　本文中「責」の振り仮名は原文のまま。○**天目山**　現山梨県東山梨郡大和村田野。当時の田野村、天目山の麓で、織田・徳川連合軍に追われた武田勝頼と長子信勝を始めとする婦女を含む主従九十名が討ち死にした。○**軍は三才相応するをもつて要とす**　三才は、天地人のこと。戦の要は三才が互いに応じることである。○**往亡日**　凶日の一つ。陰陽道で、外出を忌み、特に出発、船出、出軍、移転、結婚、元服、建築などに不吉な日という。立春から七日目、啓蟄から十四日目、清明から二十一日、立夏から八日目、芒種から十六日目、小暑から二十四日目、立秋から九日目、白露から十八日目、寒露から十七日目、立冬から十日目、大雪から二十日目、小寒から三十日目に当り、一年に十二日ある。○**山本勘助**　？～一五

六一。戦国時代の武将。名を晴幸といい、武田信玄の足軽大将の一人。父祖は代々駿河国富士郡山本村に住し、祖父貞久は今川氏に仕えて軍功をあげ、姓を山本に改めた。勘助の父は図書といい、明応二年（一四九三）にその四男に生まれたという。はじめ源助貞幸と称したと伝えられ、十二歳で三河国牛窪の牧野家の家臣大林勘左衛門の養子となり、勘助と改めた。二十歳の時、養家を去って諸国遍歴の旅に出たという。その後、武田信玄に仕え、重用された。『甲陽軍鑑』には勘助の活躍が随所に見られる（国史大辞典）。○**丸日取**　一年を通じて用いられる吉凶の日取り。○**前原筑前守が相伝せし月切の日取**　月切は、一ヶ月ごとに区切りをつけること。また、何ヶ月かに月を限って定めること（日国大）。月の日取りの吉凶の意か。○**小笠原源与斎**　戦国時代の武将。武田信玄の足軽大将の一人。戦の軍配を行った。○**八方懸の口伝**　『甲陽軍鑑』品五十三に「八方懸之事　信州先方小笠原源与斎」とあり、方の吉凶が記させている。○**軍謀団**　『甲陽軍鑑』品五十三に、山本勘助が「周文王の団扇の事」として、日取りを奉っている。○**道虚山**　地名として見あたらない。長篠の合戦に於ける武田勝頼の陣は医王寺山で、道虚日の方角がここに当たるのか。○**道虚日**　陰陽道で他出をきらう日。毎月の六日・十二日・十八日・二十四日・晦日。○**切田堀切片折**　切田は、辞書等に未確認。切立か。武力をもって激しく攻撃すること。また、そうして敵勢を追立てること。堀切は、外敵の侵入を防ぐために掘った壕や水路。「foriqiri（ホリキリ）。軍勢とか獣とかが通らないように道にある、あいた堀、すなわち、或る種の凹み」（日葡）。片折も辞書等に未確認。○**殺所**　切所か。敵の攻撃にそなえて、交通の要所に設けたとりで。○**斥候**　戦時に敵情を探ること。またそのための要員。敵地に単独、あるいは集団で出向いて行う場合と攻め寄せてきた敵軍の様子を望楼などからうかがう場合とがある。古く斥候（うかみ）とも。「斥候　モノミ」（書言字考）。○**長坂釣閑**　既出。巻二―四。？～一五八二。戦国時代の武将で甲斐武田氏の家臣。武田信玄・勝頼の二代に仕え、甲斐国巨摩郡逸見筋長坂郷を領す。実名を光堅といい、はじめ左衛門尉を称し、出家して釣閑と号す。『甲陽軍鑑』によれば、信玄期には足軽大将衆で、騎馬四十騎足軽四十五人持であった。信玄の没後、天正三年（一五七五）五月に、嗣子勝頼が長篠の戦で大敗し、多くの家臣が戦死すると光堅と跡部勝資とが両職に任用され、以後政策決定に関与することになった。十年三月、武田氏の滅亡後、織田信長に誅殺された。○**内藤修理**　内藤昌豊。？～天正三年（一五七五）。武田の家臣。天文十五年（一五四六）、武田信玄から五十騎持を命ぜられて以来、内藤を名乗る。侍大将、のち上野木に箕輪城代となり譜代家老衆二百騎を加えられる。永禄十一年（一五六八）、三増の合戦で小荷駄奉行を勤め、天正三年（一五七五）、長篠の合戦で戦死。○**はだ〳〵**　肌肌。性質などが合わず、一つに交わらぬこと。そりが合わぬさま。○**強み過たる大将**　勝頼をさす。「つよ過ぎたる大将は、計策武略の知恵をばよはきに相似たる事とて、嫌ひ給ふ。其意地をさして、過ぎたると申すなり」（『甲陽軍鑑』品一四）。○**かうばり**　強張。精神的物質的に庇護を加えたり、尻押しをすること。○**讒**　そしる。事実に無いことを告げ口して他人を陥れること。「讒　セカシラ」（易林本）。○**信玄の跡をやう〳〵四郎殿敵の勝頼名をばながしの**　『甲陽軍鑑』品五十二「長篠合戦付高坂迎に出る事并弾正諫言之事」所収。○**高低竪起孤輪月〜**　典拠未詳。当話の素材となった『剪燈余話』では、硯、筆、銚子、甑、衣装蒲団、木魚、扇が詩を吟ずることになっている。当該話では扇の詠。意味は、「上下に立てれば孤輪の月のよう、その扇が動けば涼風が起こる。それなのに弄ばれて捨てられて土に埋もれてしまった扇は、骨皮が腐り落ちぶれてしまった」。○**当時得意龍吟調〜**　典拠未詳。笛の詠。意は、「昔は竜吟の調べを奏でるのが得意であった。一曲吟ずれば碧霄に響き渡ったものである。今は庭の破れた竹となり、林に埋もれ、舞踊の嬌を懐かしむだけである」。○**荐掃埃塵更靡遑〜**　典拠未詳。当該話では帚木の詠。意は、「どんな時も埃塵を払って暇すらなかった。今では草臥れて鬚も無くなってしまった。さながら憔悴

した荒村の客のよう。朽ちた土塀に寄るのみである。」○**精魅**　ものの け。ばけもの（大漢和）。

【出典】『剪燈余話』三「武平霊怪録」、『剪燈新話』四「龍堂霊怪録」〈麻生〉。

【余説】武田信玄・長尾謙信・北条氏康等戦国の武将たちの評判譚の趣向は、既に『伽婢子』五―二「幽霊評諸将」にみられ、いずれも構想を「龍堂霊怪録」に従いつつ、それぞれの武将の評判は『甲陽軍鑑評判』に拠るところが大きい。

斉仲和はその名は諧といい、漳州の人であった。紅巾の乱のために家財を失い、流浪の末、武平の項子堅の家に出入りするようになった。子堅が没すると、臨汀の山中に葬りその側に帰全庵という庵を建てた。仲和は項家へ往来する途中にこの庵に宿泊していが、数年項家を留守にした間に、項家が滅び、庵も廃れてしまった。それとは知らず庵へ訪れると、留守番の僧と項家の親類と名乗る石子見・毛原穎・金兆祥・曽瓦合・川以礼・上官蓋・木如愚・清風先生という者たちが集まっていた。

その夜に、皆で詩を吟じて明かした。明け方になると皆の姿が消え、庵は草深い空庵で、客人は泥の仏像と欠けた硯、禿筆、銚子と甑、衣裳布団、棺材、木魚、扇となっていた。これらが迷って出たのだと知ると、仲和は逃げ出して家に帰ったが、重病に倒れてしまった。そして、「いつかは上棺蓋と同じ運命となる」と言われたことを思い出し、死を悟って医者、薬を拒み、半月後に亡くなった（『剪燈余話』三「武平霊怪録」）。

○＊天狗にとられ後に帰りて物がたり

＊慶長のすゑの年、＊藤の杜に彦八とて常に田畑をかうさくし、＊ふしみ＊木幡の人、もし＊明神に＊御湯神楽をまいらすれば、彦八出て太鼓をうち、＊御詫宣あるには、よろしく＊あどをもいたしけり。その子は、次郎と名づけて、＊社家にかゝへをきて＊宮地の掃除をもせさせ、木の葉をからせけり。心だてをくれたるやうなりけれども正直なるものにて、十六七までは、いとまある時は、＊ふしみかいだうの子どもに＊友なひけり。ある時＊行がたしらずなりければ親＊悲しがりて＊稲荷山の奥＊霧が谷＊霞の谷までも尋ねさがしけれども跡もなし。

かくて五年の後、次郎帰りて、大なる杉の木の枝に跨がりて居たりしを、彦八見つけて、次郎にてはなきかといふ声のしたより下りつゝ、親とつれて家に帰り、初めのほどはその有さま、さながら山の猿のやうにて手足もよごれ、＊頭の髪は榛のことく乱れ、物をもいはざりしを、母とかく湯をあびせ髪あらひ、食物もよろしきやうにあてがひくはせてやしなひければ、十日ばかりの後より、人心地つきて物いひ出たり。あたりの人も、よき事やとてあつまり来りて、いかに次郎久しく＊余所に住て、故郷の恋しくもなかりしやと問。

次郎是より語りけるは、今年かぞふれは我年廿二になる。他所をめぐりし事、をよそ五年に及ぶかとおぼえたり。其比は八月の初めつがた、風やう〳〵涼しく＊田面の穂なみ出がたになり、＊畆をつたふて行わたるに、いづくともしらずたうとげなる僧の＊紅染の衣の上に＊紫の袈裟をかけ、手には水晶＊いらたかの数珠をもち、いかに次郎よ我ゆくかたへ雇はれ来れ、あしうはせじとあり。畏まりめしつれられて、いづくともなく空を飛やうにして、京の東＊如意か嶽といふ山の峯に休みて御僧もろ友に岩に尻かけて居たりけるに、あやしき＊小法師ばら手ごとに食物もち来り、御僧にも奉り我にも食せけり。何といふ物とはしらず味はひうまき事限りなし。

やう〳〵日暮かたになり御僧仰られしは、おどろくべき事有べし、汝＊かまへておそるゝなよとあり。いか成事のあるらんとおもふ所に、同じさまの僧七八人まいられたり。＊空より鉄の釜、おちさがり岩ほのまへに金輪にのりてすはりけり。その次に鼻たかく眼大に

して、両の脇に翼ある法師三人、いづれも足は鳥のごとく＊柿色の衣に太刀をはき、＊たまだすきあげ＊脛高にかゝげ、＊甲斐〳〵しき躰にて白かねの茶碗に鉄がねの杓を釜にさしいれ、銅がねの湯を盛て七八人並居たる＊僧衆にまいらするを、僧衆、うたて憂たる色あらはれ茶わんを取て飲けるに、僧衆一同に＊ふしまろび、頭の上より黒煙たちてもえあがり、空のあひだには、ばく〳〵と鳴ひゞく音して、すさまじき限りなし。暫くして、僧衆は＊もえ株のやうに、黒くふすぼり、とばかりありて、夢の覚たるごとく、又おきて座せしかば、本のごとくの僧となり、たがひに＊礼義正しく散わかれて帰りけり。

初めの御僧次郎にむかひて、此有様かまへて人に語るなと、よく口がためし給ふ。我漸やく飢もなく只眠来るを今宵は臥てつかれを休め。明日は＊微明より起あがるへしとて、岩やの内に入らる。夜あけてより、此僧につれられ空にあがりて飛ゆく程に、霞をひらき雲をわけて、こゝはいづくにて候と問ば、＊播磨の国姫路といふなり。日はまだ＊卯の刻ぞ、うえたらば物くはせんとて、大なる家の内につれてゆき給ふに、振舞ありとて、人おほくひしめきけれども、僧をも次郎をも見とがむるものなし。次郎心にかなふもの取くはせ、それより出て、雲をかけりつゝ青海ばらを足のしたに見て、＊杳かに高くあがりてゆくかなと思ひ、直下とみおろせば、所〳〵住あらしたる家ども、海にさし入たるに作りかけ、ほのかにみゆる一村里の＊苫やかた、＊みるめを刈ほすまでも＊心ありがほなり。＊芦の屋近からず、＊塩屋のけふりのたちのぼるけしき、＊うす墨に書たるやうにおもはるゝ。西のかたは、海はる〴〵とみえわたり、並たてる松の木のまより、帆かけたる舟ども沖に行かふさまも、波にうつろふ＊いさり火の影、日はすぐに海の中に入はつるかとあやしまれながら、たかき山にをり立たり。

こゝはいづくぞと問申せば、＊伯耆の国大山なりとかや。谷をこえて大なる＊楼門ありあゆみ近づきて案内せらる。すさまじげなる法師出て、こなたへと申す。僧は次郎とともに門の内に入けるに、あるじの僧出らる。年のほど五十計とみえしが、座になをりてさま〴〵の物がたりせしあひだに、四五人まいりあつまる。そのさまいづれもみな、藹たけ徳たかく見えたり。其中にあるじの僧申されけるやう、それ＊生死の一大事は、たかきもいやしきも、のがれがたき道なり。おこなひすましてありとみゆるも一念の＊妄執をおこす時は、やがて我らのかたに引入るたよりとなるさればこそ、昔今＊徳行たかき輩、おほくは＊魔道の＊眷属となれり。我らがそのかみのまよひも皆またかくのごとし。今の世に学道すぐれ徳行高しといふもの、さらにまことの＊大道にはかなひがたし。知ざるを知りと思ひ得ざるを得たりとおもふ。我は人にはをとるまじとすぐれたるを悪み、まさるをそねみ、＊我慢増上慢、山よりもたかく海よりもふかし。我らあながちに便りをもとめ、伺がふに及ばず、魔道の網にかゝる人のみこれおほし。

また更に他の＊障碍にも依ず、みづから大道をさまたぐるぞかし。＊修禅寺の＊恵山長老は＊唯識法相の宗義をあきらめ、＊花厳涅槃の理に達して常に講談をつとめ、数百人の弟子を領ぜられけれども、その心ざし、わが宗流をたてゝ他の宗義ををとしめ、心に＊彼我をいだき、＊上覚寺の＊行蓮上人は、＊説法に名をほどこし、諸方の男女を＊勧化し、＊一切経を書たて、仏像おほく作りて、くやうをいとなみ世には仏のやうにたうとひしかとも、一生のあひだ、只＊経論をあつめ仏像をつくり、他の財物を求めすでにもとめ得ては、むさぼる心のおこりて、＊功徳は有に似て却て＊貪欲の＊煩悩となれり。＊霊光寺の＊明寂法師はそのかみ武門の＊高家なりけるを、たちまちに武職をすてゝ仏道にいりけれども、その俗家にありし時は理をまげ、法を破り百姓の財産をうばひ、人を痛めて取あつめたる金銀を、寺に入て堂舎をたてらる。これらの輩みな、我らの障碍に依らず、死して魔道に入侍べり。是のみならず、又諸方の出家といはるゝ者、幾千万とも数しらず。＊行もなく智もなく＊旦那を諂らひ、いつはりをかまへ、欲のふかき事＊俗よりもまさり、腹のあしき事＊在家に過て、世をわたる法師死しては、＊地獄に落て＊信施のむくひをつ

くなふ。

或は＊儒道を学ぶもの＊清旦＊浩然の気をやしなふといふ事は夢にもしらず、詩をつくり文を書とては心にもなき、いつはりを筆にあらはし、＊五常の道はおこなはずして、人をたぶろかし＊禄をけがし、手を出して盗みせぬばかりに月日を送る。＊天理に背き＊神徳にたがふて死しても＊本徳に帰る道なく、＊三悪道におつるものなり。在家は世わたり身を過るあひだに＊後世の道をねがふとはすれとも、愛欲にひかれて真実の思ひなく、おほくは地こくにおつとかや。

今の我らもかゝる心ざしより魔道に入て、堪がたき苦しみをうけながら、＊懺愧懺悔の心をおこさず、却て＊仏敵法敵となる浅ましさよといふかとすれば、八人の僧はいふにをよはず、数多の法師原まで、おそれわなゝき、立さはぐほどにみなともに宮殿の柱につながれて、はたらき得ず。そらより猛火もえくだり、宮殿楼閣一同にもえあがりおめきさけぶ声とともにやきくづれて残る人はなし。次郎ばかりはつなかれずして、遠く谷かげに、にげのがれたり。とばかり有て、さきの僧来りて、次郎をつれて山海出つゝかへりみれば、さしも作りならべし、山中の宮殿楼門は跡もなし。

是より次郎は僧に連られ又空をかけりて、西国のあひだ、残らずめぐりて又京ちかく帰るとて、＊播磨の灘にて＊便船を請れしを、＊舟子ども、はしたなくいらへてのせざりければ、僧すでに歩よりゆく〳〵いでをのれらに思ひしらせんとて、沖のかたにむかひて印を結ばれしかば、俄に黒雲おほひ大風吹おこり、海のおもて、くら闇のごとく波たかくあがり、雲の山をつき砂の山をかさね、数多の舟ども、＊簸にてひるがごとく、垢をかへ苦を打いれて磯近くよせんとするに叶ひがたく、舟の内には、＊伊勢のかたにむかふておがみ、＊観音経をよみ念仏申す。やう〳〵日の入がたに風やみ浪しづかに成て、おほくの舟ども、よみがへりたる心ちして＊室の津にかゝり、＊兵庫の浦まで吹よせられ辛して命たすかり、悦ぶ人もおほかりけり。

僧は又、それより程もなく＊山崎まで来りて、夜の明がた次郎におくらせ、都に入て西の岡より＊北山をめぐり＊東山に出ければ、＊五条川原に＊能ありとて、都の人貴賤上下＊足を空になして、芝居に入あつまる事＊雲霞の如し。＊桟敷には色〳〵の幕うちならべ誰とはしらず、歴々の人ども見物するを、僧は次郎をつれて見めぐりけれどもとがむる人もなし。

能はすでに初まり、名たかき上手共入替り〳〵いたしけるに、諸人心を空になし、万事を忘れて見居たるを、僧すなはち次郎に語りて、此やつばらあまりに物の心も失なひたるに諸人の目をさまさせんとて、舞台の上に座して何やらんとなへられしに、忽に＊三条西の洞院より焼出て、黒煙舞あかり一面に成てもえわたる。風あらく吹しきて焔とびちりけれは町つゞきをこえて、爰かしこにもえあがる。すはや火事よといふほどこそ有けれ。幾千万ともなき見物の諸人等上を下にかへし、桟敷よりころびおち、芝居楽屋＊鼠戸ひとつになり、我さきにとこみあひ押あふて、ふみたをし臥まろび、女童のなきさけぶ声、物あひ更にわかれず。

とかくして、火も静まり僧は次郎をつれて、あゆむともなく飛ともなく都を出て、さゞ波やしがの山ごえ＊比良、＊小松、今津、＊海津をうち過て、＊越前の敦賀に出たり。いたらぬ隈もなく見残す所もなく、飢をもしらず寒からず、東国のかたあまねく廻りて、＊富士の高嶺、＊浅間が嶽、＊田子の入海、＊清見が関、＊箱根の山より＊駿河の国、＊鎌倉山の昔の跡聞つたへし名所はめくり残せる方もなし。春もたち夏もすぎ、秋の空色の時も心にくるしむ事もなし。暫らくも身を留めず、天がしたを打めぐり、山河海のおもて、空をかけりてゆくさきには折々只おそろしき事、＊奇特の事心の外の旅の間に年の暮、月日のたつをも覚えず、五年の＊光陰を過て二たびこゝに帰り来るもながきいとまにあらずとさま〳〵語りしが、廿日計は家にありて、見なれぬ奇特を諸人にあらはし見せて、又行がたなく成たり。此ほとの＊形見とやおもひけん、檜木笠、檜の棒、ちぎれたる＊篠懸を残しをきたり。父彦八も年よりよはひかたぶきて、いく程なく身まかりけ

り。

残しをきける篠懸は、＊地下人等、＊瘧をふるひて病ふせりけるを、彼すゞかけを枕もとにをきぬれば、やがておこりの落ければ、方々借つたへて秘蔵せし後に行かたなく失なひけり。檜木笠ひの木の棒は古き家のならひ、雨もりて朽はてたりとかや。

○**天狗**　山中に住み、人をたぶらかしたりする妖怪。驕慢な心を持つものや、罪を得、恨み抱いて死んだ者、特に僧が天狗になると解され、魔界に住むものといわれた。「聖教ノ中ニ天狗ト云ハ魔王所部ノ従類也。……天狗共、天狐共書テ通ヒ用也」（『塵添壒嚢鈔』十三　天狗名目事）。○**慶長のすゑの年**　一六一五年。○**藤の杜**　現京都市伏見区深草鳥居崎町。「稲荷社の南にあり。これ、早良親王を祭るところなり」（『雍州府志』三）。○**ふしみ**　伏見。現京都市伏見区。現在の桃山からその西麓、北の稲荷社にかけての地。○**木幡**　現宇治市。大和より近江への古北陸道の要衝。○**明神**　稲荷社。○**御湯神楽**　熱湯をかけて浄めながら舞う伊勢流の神楽。○**御詫宣**　神などのおつげ。「詫宣　タクセン」（諸節用集）。○**あどをもいたしけり**　「アド」は能狂言で、主役であるオモあるいはシテの相手をする役。脇師。ここでは、よく相手をしていた、の意。○**社家**　世襲の神主の家柄。神社。○**宮地**　神社の境内。○**ふしみかいだう**　巻四―七参照。伏見街道。京都五条橋詰東へ三筋目の本町一丁目から南へ大仏前、東福寺、稲荷社、藤森、深草を経て伏見の京橋へ至る三里ほどの道筋。洛東五条橋口（現東山区）から伏見町に至る街道をいう。『都名所車』（正徳四年刊）は「伏見海道　五条橋詰東へ三筋目、南は大仏・東福寺・いなり・藤の森・ふし見への道」と記す（『京都市の地名』日本歴史地名大系27）。○**友なひけり**　共なひ。遊んでいた、の意。「共」を「友」と表記するのは近世の慣用。○**行がた**　「Yuqigata ユキガタ　人が向かって行った方向、または、人の姿が消えて行った方」（日葡）。○**悲しがりて**　かわいそうと思って。○**稲荷山**　現京都市伏見区にある稲荷神社の背後にある山。東山三十六峰の最南端の山。標高二三二メートル。一の峰・二の峰・三の峰があり、三ヶ峰と通称される。神奈備の遺跡として知られ、全山が稲荷信仰の対象となっている（『京都市の地名』日本歴史地名大系27）。「稲荷山　恵日山の南西よりなり。山のいたゞきに三つの壇有。いにしへいなり三社此所にあり。弘法大師今の地にうつし給ふ。毎年正月五日社家山の上にのぼり。三の壇を拝み奉る也。みたけ参りとはその事か。俗に御壇ともいふ」（『名所都鳥』巻一）。○**霧が谷**　「霧谷　谷口のひかしに至ッての総名なり」（『拾遺都名所図絵』四）。なお「谷口」は、『京都市の地名』（日本歴史地名大系27）に、「竜安寺門前村　現右京区竜安寺　谷口村ともいう。衣笠山の西南麓に位置し、東は等持院門前村（現北区）、西は御室門前村、南は妙心寺域、北は大北山村（現北区）の山林にそれぞれ接する。村内の北に竜安寺があり、その後方の山に竜安寺七陵がある」とある。○**霞の谷**　既出。巻四―七。現京都市伏見区深草付近。藤の森東側に位置する。「霞ノ谷　深草ニアリ。オヨソ、宝塔寺ノ後山、赭赤ノ地、スベテ霞ノ谷ト号ス。土人、今、霞ノ岡トイフ」（『雍州府志』九）。○**頭の髪は榛のことく乱れ**　雑草が生い茂るように、髪の毛がくしゃくしゃに乱れている様子。「棘　ヨトロ　荊　ケイ同　榛同」（色葉字類抄）。○**余所**　「餘所　ヨソ」（諸節用集）。○**田面**　田のおもて。田のおも。○**畝**　この用字で振り仮名「あぜ」のよみは諸節用集等未確認。○**紅染の衣**　紅染の僧衣。「紅染」は「やわらかくあたたかみのあるくれない色。真赤に映えるからくれないの濃い赤」（『日本の染色』山邊知行、毎日新聞社）。「衣」は僧衣のうち、肩に掛ける装飾的な袈裟を除いた衣服の称。○**紫の袈裟**　僧の着る法衣で、着衣には勅許を必要とした。「袈裟　ケサ」（下学集）。○**いらたかの数珠**　苛高数珠。珠が角張ってそろばん玉のような形をした数珠。押しこむときに高い音を立てる。山伏などが主として用いたもの。振り仮名「ずじ」は、「ずず」もしくは「ずじゆ」の誤りか。「Iratacajuzu をおしもむ」（日葡）。○**如意か嶽**　東山連峰の主峰（四七四メートル）。浄土寺・

鹿ヶ谷の東にそびえる。「東山の頂を、如意が嶽といふ。瀑泉、漲り落つ。これを如意の瀑と称す。これ、洛下の奇観なり。この嶽より、直に園城寺に赴く。これを、如意越といふ」（『雍州府志』巻一）。○**小法師ばら**　年若い修行中の下級の僧たち。「ばら」は軽蔑した場合に使われる。○**かまへておそるゝなよ**　決しておそれるなよ。○**空より鉄の釜おちさがり**　「虚より、鉄の釜ふり〳〵とおちて、其中に熱鉄の湯わきかへる。それにつゞきて法師一人くだり、銚子に熱鉄の湯をもいれ、盃にいれて了仙にわたす」（『伽婢子』巻十―一）。○**柿色の衣**　柿渋で染めた衣。修験者が着し、「柿色」というだけで、山伏の衣の意を表す。○**たまだすき**　襷の美称。○**脛高**　衣の丈が短く脛の高い部分まであらわになっていること。○**甲斐〳〵しき躰**　ここでは、勢いよく、もしくは、あらあらしい様子で、程の意か。「Caigaixi カイガイシイ　強くてたくましい。また元気で勇ましい」（日葡）。○**僧衆**　「Soxu ソゥシュ」（日葡）。○**ふしまろび**　あまりの熱さに転げ回り。○**もえ株**　燃え残りの木。燃え杭。○**礼義**　「れへぎ」の訓みは未確認。「Reigui レイギ」（日葡）。○**微明**　既出。巻五―二。一般的には「未明（ビメイ）」で夜明け前をさすが、ここでは微かに明るいこと、夜明けをさす。○**播磨の国姫路**　現兵庫県飾磨郡。○**卯の刻**　午前六時頃。○**杳か**　「杳　ヨウ　ハルカナリ」（倭玉篇）○**苫やかた**　苫で葺いた舟の屋形。「Tomayacata トマヤカタ」（日葡）。○**みるめ**　巻五―六参照。海藻ミルをいう。「海松・水松（みる）」は、緑藻類ミル科の海藻。本州から北海道南部にいたる沿岸の水深一～二メートル波静かな海底の岩上に生える。「水松　ミル　海藻」（天正本）。「海松　ミル」（饅頭屋本）。「海松布　ミルメ　磯べ　浜伝ひ　芦やの裏　汐汲」（『類船集』）。○**心ありがほ**　いかにも考えがるような顔つき。いかにも分別がありそうに見えるさま。ここでは、我こそはと得意がる顔つきの意か。○**芦の屋**　芦で屋根を葺いた粗末な小屋。○**塩屋**　海水を煮て塩をつくる家。塩釜のある粗末な小屋。○**うす墨に書たるやうにおもはるゝ**　薄墨で書いた山水画を思わせるかのように、景色が霞んでいること。○**いさり火**　「Isaribi イサリビ　夜、漁師が魚をとるためにともす火」（日葡）。○**伯耆の国大山**　鳥取県西部、中国山地北側にある死火山。群峰中の最高峰剣ヶ峯は標高一七二九メートルで中国地方の最高峰でもある。大山はその美しい山容から、古来さまざまな信仰の対象となった。天平五年（七三三）成立の『出雲国風土記』の意宇郡の条には「伯耆の国なる火神岳」とみえ、国引の際「堅め立てし加志」、杭にしたのが大山であると記される。（中略）また山岳修験の山としても開かれ、九世紀末から一〇世紀頃までに大智明権現（地蔵菩薩）を信仰の中核とした天台宗寺院としての体裁が整えられた。本尊大智明権現の信仰は修験により唱道され、民間に広がっていたとみられる。（中略）備前の国南部児島（現岡山県玉野市）などを本拠とする五流山伏は中世から近世にかけては大山をその主要修行としていた。大山には伯耆坊とよばれる天狗がいると信じられ、大山の天狗を祀る風習も各地にあった（『鳥取県の地名』日本歴史地名大系32）。○**楼門**　二階造りの門の総称。中世以降、社寺で広く用いられた。○**生死の一大事**　ここでは、どんなに尊い人物であっても、死を迎える最期は免れることはできないのである、の意。「Xoji シャウジ Vmare xisuru（生まれ死する）出生と死去」（日葡）。○**妄執**　仏語。表面の事象にとらわれて、迷いの心から物事に執着すること。妄念。「Moxu マゥシュゥ　Midarino xugiacu（妄りの執着）」（日葡）。○**徳行**　仏語。「徳行　トクキヤウ」（色葉類字抄）。「Tocuguio トクギョゥ　功徳となる所行、または有益な所行」（日葡）。○**魔道**　天狗道。高慢な人間が堕ちる世界。「Mado マダゥ　Tenguno michi（天狗の道）」（日葡）。○**眷属**　仏語。従者。「Qenzocu ケンゾク」（日葡）。○**大道**　ここでは、我がなく、公正な真理を極める道。○**我慢増上慢**　「我慢」は仏語で、仏教で戒める七つの慢心の一。傲慢で他に対して侮蔑的であること、また強情でわがままなこと。「我慢増上慢心の、便りを得んと思ふにも」（謡曲「善界」）。「増上慢」も仏語で、正しく真理を体得して悟り入ること（証）ができていないのに、既にできて

いると思い込み、他を軽蔑しておごり高ぶること。「Zogioman ゾゥギャゥマン Daimanqi（大慢気）非常な高慢」（日葡）。○**障碍** 妨げること。たたり。「障碍 シヤウゲ」（饅頭屋本）、「障礙 シヤウゲ」（易林本）。「Xogue シャゥゲ Sauari,ru（障り、障る）障害、邪魔」（日葡）。○**修禅寺** 伊豆国田方郡にある曹洞宗の寺。○**恵山長老** 未詳。○**唯識法相** 「唯識」は仏語で、あらゆる存在・事象は、心に備る識の作用によって実在しているように受け取れるのであり、実際に存在するのは識であって、それを備えている心がまずは唯一の存在であるとする考え。法相宗の根本思想。「法相」も仏語で精神的・物質的に存在するもの、事物のいっさいの特質、およびいっさいの事物における異なりの姿をいい、すなわち、万有の実相、軽くは、存在の姿の意に用い、また、その本質（法性）の意にもいう。「法相 ホフサウ」（前田本字類抄）。○**花厳涅槃** 「花厳」は『華厳経』に説かれている教義で、万行の華が仏果の万徳を荘厳する意。多くの修行を積んで、立派な功徳を得ること。「涅槃」は仏語で、すべての煩悩・迷い・束縛・執着などを断ち切って実現される悟りの境地。ここでは、多くの修行を積み、すべての煩悩・迷い・束縛・執着などを断ち切って実現される悟りの境地をいうか。○**彼我をいだき** 他者は劣り、自分だけが優れていると思うこと。○**上覚寺** 未詳。○**行蓮上人** 『国書人名辞典』には、鎌倉時代末期・南北朝時代の僧侶・歌人で、法諱行連、俗名を惟宗良俊（左近医師惟宗経俊の男。従五位下、下野権守。のち出家）とその名がみられるが、モデルは未詳とすべきか。○**説法に名をほどこし** 説法で名を広め。「Xeppo セッポゥ Noriuo toqo（法を説く）教法や教義をとくこと」（日葡）。○**勧化** 「Quanqe クゥンケ Voxiye susumuru（教え勧むる）教授したり、教義を教えたりしてはがますこと」（日葡）。○**一切経** 仏語。仏教の経典の総称。経・律・論の三蔵、および、それらの注釈書。○**経論** 仏語。釈迦の説法を集成した経と菩薩が経を注釈した論。○**功徳** 仏語。効能福徳の意。善行の結果として報いられる果報。○**貪欲** 漢語、また、仏語。欲が深いこと。むさぼって飽きることがないこと。仏教でいう三毒や十悪の一つで、煩悩の代表的なものとされる。「貪欲 トンヨク」（易林本）、「Tonyocu トンヨク すなわち、Yocuxin（欲心）吝嗇、あるいは、強欲」（日葡）。○**煩悩** 「Bonno ボンナゥ Vazzurai nayami（煩ひ悩み）すなわち、Togano sonio（科の惣名）あらゆる罪科を個別的に言い表わすのに用いる仏法（Buppo）の語」（日葡）。○**霊光寺** 未詳。『花洛羽津根』七に、「具足山立本寺塔頭内野 同末寺 深草極楽寺村 霊光寺」とある。また、『鳥取県の地名』（日本歴史地名大系32）によると、矢津村（現鳥取市立川町）に黄檗宗霊光寺があったという。○**明寂法師** 未詳。○**高家** ①格式の高い旧家。名家。②武家の名門。③公家。公卿。④江戸幕府の身分兼職名の一つ。老中の支配に属し、朝廷への使節、伊勢・日光への代拝、勅使・公卿衆の接待、その他幕府の儀式、典礼をつかさどった。武田、畠山、織田、上杉、吉良など室町以来の名家が任ぜられ、万石以下ではあったが、官位は大名に準ぜられ、四位・五位の侍従、または少将に昇進できた。ここでは、④の意か。「Coqe カゥケ」（日葡）。○**行** 行い。つとめ。修行の略。○**旦那** 檀家。○**俗** 出家していないもの。在家。○**在家** 出家の対。家に居住して自ら生計を営む世俗の人。○**地獄** 地下にある牢獄の意。苦しみの極まった世界。現世に悪行をなしたものが死後その報いを受ける場所。○**信施** 在家信者が三宝（仏・法・僧）にさげる布施。ほどこし。信者が寄進するもの。○**儒道** 儒教の道。孔子・孟子の教え。○**清旦** 清らかな朝。○**浩然の気** 孟子の教えで天地に充満している至大至剛の元気をいう。行いが道義に合し、心に恥じる所がなければその身に生じて不撓不屈の道徳的勇気となる。「何ヲカ浩然ノ気ト謂フト。曰ク、言ヒ難キナリ。其ノ気タルヤ、至大至剛、直ヲ以テ養ウテ害スルコト無ケレバ、則チ天地ノ間ニ塞ガル」（『孟子』公孫丑）。○**五常** 人の守るべき五つの常道。仁義礼智信をいう。儒教の教えで社会に対する義務として立てられた。○**禄** 富、財産。「Roku タマモノ、すなわち、タカラ」（日葡）。○**天理** 天

然自然の道理。人為でない天の正しい道理。宇宙を支配する神の意思。○**神徳**　神の功徳。神の威徳。○**本徳**　本来固有の功徳・価値・性質。○**三悪道**　「Sanacudo　三つのインヘルノ（地獄）。すなわち、地獄、餓鬼、畜生」（日葡）。○**後世**　①来世。未来に生まれるべき世界。②死んでからの極楽浄土。○**慙愧懺悔**　「慙愧」は罪を恥じること。「懺悔」は悔やんで罪の許しを請うこと、悔い改めること。○**仏敵法敵**　仏法に対して仇をなすもの。宗教上の敵。○**播磨の灘**　瀬戸内海東部の海域。東は淡路島、西は小豆島で限られる。○**便船**　都合よく出る船。「Binxen　自分で傭ったのではなくて、利用して乗って行く船」（日葡）。○**舟子**　舟に乗り込んで舟をあやつる人。ふなびと。水夫。○**簸にてひるがごとく**　箕の上で穀物をふるってくずやゴミを取り除くこと。「簸　ミ」（倭玉篇）。○**伊勢のかた**　三重県津市の恵日山観音寺（真言宗）の津観音か。○**観音経**　「妙法蓮華経」観世音菩薩普門品の別称。観音が衆生の諸難を救い、願いをかなえ、あまねく教化することを説く。○**室の津**　兵庫県揖保郡御津町にある地名。漁港があり、江戸時代には瀬戸内海航路の寄港地であった。遊女の発祥地としても知られた。○**兵庫の浦**　兵庫県神戸市兵庫区、神戸港の旧称。古来の要港で、西国・大陸航路の発着点となり大坂城築城後は大坂の外港となった。○**山崎**　京都府南部の大山崎町と大阪府島本町の一部とにまたがる地区の旧称。淀川が京都盆地から大阪平野へ流れ出る狭隘部の北側に位置する。油座があり古来、交通の要地。摂津と山城の分岐点。○**北山**　北の方角にある山。特に京都北方の船岡山・衣笠山・岩倉山などの諸山の称。○**東山**　京都市、鴨川の東に連なる丘陵。京都の東方に当る山の意。ふつう北は比叡山から南は稲荷山までを指し、古来、東山三十六峰の称がある。風光すぐれ、名勝旧跡が多い。西山・北山に対していう。○**五条河原**　京都市左京区下鴨。高野川加茂川の合流する川原のこと。芸能の興行や納涼の場として有名。○**能**　中世芸能の一つ。「田楽」「猿楽」「延年」などの演ずる歌舞劇。本話では寛政五年の足利善政の勧進能のこと。○**足を空になし**　足が地に付かないほど落ち着かないさま。「サレバ万人手足ヲ空ニシテ朝夕是ガ為ニ姪費ス」（『太平記』二七）。○**雲霞**　くもとかすみ。人が多く集まっているさまの形容。○**桟敷**　「桟敷　サンジキ」（合類）。○**三条西の洞院**　『伽婢子』十三―一に「桟敷の東のはしより火もえ出で」と天狗による火事の記述がある。○**鼠戸**　劇場の木戸口。○**比良**　滋賀県西部、琵琶湖西岸沿いに北東から南西へ連なる地塁山地。高所が二つあり、北の武奈ヶ岳は標高一二一四メートル、南の蓬莱山は一一七四メートル。その雪景は「比良の暮雪」と称し、近江八景の一。天狗、比良次郎坊がいる。○**小松**　石川県南部の市。絹織物・九谷焼などを生産。安宅の関址・粟津温泉がある。○**海津**　滋賀県北部、琵琶湖北岸の地名。昔、湖上水運の要地。○**越前の敦賀**　福井県の南部、敦賀湾に面する港湾都市。古代から日本海側における大陸交通の要地。○**富士の高嶺**　静岡・山梨両県の境にそびえる日本第一の高山。頂上には深さ二二〇メートルほどの火口があり、火口壁上では剣ヶ峰が最も高く三七七六メートル。史上たびたび噴火し、宝永四年（一七〇七）爆裂して宝永山を南東中腹につくってから静止。立山・白山と共に日本三霊山の一。○**浅間が嶽**　長野・群馬両県にまたがる三重式の活火山。標高二五六八メートル。しばしば噴火、天明三年（一七八三）には大爆発し死者約二千を出した。○**田子の入海**　静岡県富士市南部の海浜。北に富士山を仰ぎ、西に三保の松原を望み、古来、東海道屈指の景勝地。古くは富士川西岸、蒲原・由比・興津の海岸をいう。○**清見が関**　既出。巻一―一。平安時代、今の静岡県清水市興津の清見寺の地にあった関。○**箱根の山より**　伊豆半島の基部にあり、神奈川・静岡両県にまたがる三重式の火山。最高峰は中央火口丘の一つ、神山で標高一四三八メートル。火口原に芦ノ湖があり、また多数の温泉がある。○**駿河の国**　旧国名。今の静岡県の中央部。駿州。○**鎌倉山の昔の跡**　伊豆、鎌倉幕府、また鎌倉をいう。○**奇特**　特にすぐれて珍しいこと。○**光陰**　月日。歳月（移り行く）時。○**形見**　過去の事の思い出される種となるもの。記念として残した品物。○**篠懸**　修験

者が衣の上に着る麻の衣。深山の篠の露を防ぐためのものという。すずかけごろも。○**地下人**　官位のない賤しい者。庶人。○**瘧**　間欠熱の一つ。隔日または毎日一定時間に発熱する病で、多くはマラリアを指す。

【出典】『太平記』二十七「田楽事付長講見物事」、『本朝神社考』六「僧正ヶ谷」〈冨士2〉。

【類話】『伽婢子』十三―一、『諾皐記』博士丘濡の条〈冨士2〉。

【余説】『伽婢子』十―六。

五〇年前に汝州（河南省）で村人の娘が就寝中に連れ去られたが、娘は数年後に自ら帰り、自分の体験談を語り出した。娘の話では、一人の美丈夫から、自分は天人の分合（分身）で汝を妻にするといわれ、共に過ごし、その折さまざまの奇事を見せられたという。数年を経ると悲泣した美丈夫に縁が尽きたと言われ、娘は磨って服すれば毒気を下すという青石を貰い、夕刻自宅の庭に堕とされ、その石を服すと斗余の青泥が下ったのであった（『諾皐記』上「博士丘濡説云々」）。

○板垣信形逢二天狗一

＊板垣信形は、＊甲斐の＊信玄いまだ武田大膳大夫晴信と号せし時より、＊武勇名たかく、諸方の＊軍に手柄をあらはせし者なり。晴信秘蔵の勇士なりければ、家の＊重寄も他人にすぐれたり。されども忠節ありて思慮なく、勇にして頑なる故に、＊楚忽なる事おほしとかや。

或時信形、おもてに出たるに、年のころ五十あまりとみえし＊山伏一人来りて、＊斉料をこふ。そのさま、世の常の人ともおぼえず。＊眼ざしすさまじく色くろうして、＊長たかく、筋ふとく＊骨あれて、まことに行法に苦労したるものとみえたり。信形心にあやしみ、内に呼いれて、＊客僧はいづくの人ぞと尋ねしに、是は＊出羽国＊羽黒山の＊行人なり。去年は＊大峯＊葛城におこなひ、それより＊熊野にいたり、＊年ごもりして、此ごろ爰もとに下れり。やがて羽黒山に帰り、＊一夏をおこなひ申さんとて、かた〳〵斎料をこふ事にて候といふ。信形重ねて問けるやう、＊御房只一人にて候や。又＊同行の侍べるかといふ。山ぶしこたへていはく、同行あはせて十人候。それも打ちりて、家々斎料のために、めくり候と云。信形いふやう、見ぐるしく候らへども、今夜は是に御宿申すべし。同行の山伏達をも、これへよびよせ給へといふ。山ぶし聞て、近ごろ有がたう候。さらば同行をもよびさふらはんとて、門に出つゝ、腰につけたる＊螺の貝を手にとり、＊よせ貝とおぼしくて、暫らく吹ければ、山ふし九人俄にあつまり来る。其中にも前の山伏は＊先達とみえて、九人の山ぶしはいつれも年わかく、しかもつゝしみうやまふ躰なり。

日も暮かたに及びしかば、ともし火をとり、＊非時の料したゝめ、さま〳〵もてなしけり。信形年比は物ごとつゝしみふかく侍べり。いかゞ思ひけん、山ふし達を馳走のためとて、子息＊弥二郎を初めて、＊被官の＊中間＊五三人その座に呼出し、すでに酒宴に及び、客僧も主も＊数盃を、かたふけたり。先達の山ぶしいふやう、思ひかけざる＊御芳志にあづかり、心をのぶるのみならず、旅のつかれを休候こそ有かたけれ。我ら一生もろ〳〵の行法をつとめ、諸方の名山霊地、をよそおこなふ所にみな＊奇瑞をかうふらずといふことなし。されば我らの成就する所、常にはふかく慎て、あらはさぬ事なれども、此上は何をかさのみに秘すべき。それ何にても、奇特をいたして、あるじにみせまいらせよといふ。下座の山ぶし、畏候とて、座中の膳にありし箸ども取あつめ、何やらん唱て印を結び、座の旁なる暗き所に投たり。暫しありて長＊一尺ほどの鐙武者百人計くり出たり。信形も弥二郎も目をすまして見居たりければ、座敷の真中に＊魚鱗に備へて立たり。先達の山伏云やう迚の事に軍をさせて御目にかけよと申す。次の座の山ぶし座をたちて、鉢に入たる＊薯蕷子をとりて、うしろのかたに蒔ければ、又鎧武者二百ばかり、＊鶴翼に備へてを

し出つゝ、両陣たがひに、いどみ戦かふにちいさき声にて、＊曳々＊応々とおめきさけびて突合切あふ有さま、人間の軍するに少もたがはず。首をとり、刺違へ暫らく戦かふて、両陣＊颯と引のくかとみえしかば、箸のさきに薯蕷子を、つきさし〳〵打たをれたるものなり。

信形あまりのおもしろさに、某は当家＊譜代の者にて近年諸方の強敵を＊対治するに、いつも＊先手をうけ給はり、むかふ所打かたずといふことなし。敵がたとひ金石をもつてふせぐとも、破らずしてはかなふまじと＊身命をかへりみず、つゐに＊殿をとりし事なし。世には武勇の者は稀にして、臆病者のみおほしと、思ひとりて候。＊軍法も＊日どりも方角もいらず。只武勇なれば小勢にても、大勢の臆病者は突崩すに手間もいらずとこそ覚え侍へれ。子にて候弥二郎は少心の後れたれば、某が＊鋒先には似申すまじ。あはれめづらしき術法の軍に＊たよりとなるべき事あらばつたへて給かしとそ申される。先達の客僧聞て、何にても軍のたよりに成べき事、有まじきにては侍べらず。去ながら、座中の輩をのけ給へ。あるじ一人にをしへ申さんといふ。さらばとて、弥二郎も中間をも、みな旁へ出して、剱術兵法の伝受をぞいたしける。下座の山ぶし、＊うけ太刀して、信形に指南する木刀竹刀取出し、打合突あふ音しきりにして、夜すでに＊ほの〴〵と明わたる。

中間若党ども、障子の＊隙よりも忍びてのぞきみれば、山伏とおもふ者は人にはあらで、或は鼻のさき高くそばだち、或は口のほど、鳥の＊觜のごとく、又は身に＊翅あり、＊異類＊異形の者ども なり。これはそもいか成事ぞとて、中間若党ども、太刀よ、長刀よと、＊ひしめき、障子をあけて、こみ入ければ、十人の山ぶしどもは、＊いづちへか行けん、みなきえうせて、信形は前後もしらず、＊労れ、臥たり。＊精進奇麗の＊膳部、肴以下は少も喰はず捨ちらし、酒はこぼし流し、畳の上には鳥の足跡のごとくなるが、よごれて踏たる有さま、疑がふ所もなく天狗どものあつまりけりと、家中の上下はおそれつゝしみけり。

信形は其日の暮かたに、やう〳〵睡さめて、起あがりけれども、只まう〳〵として有けり。元来したゝか者なりければ、別の事はなく＊何条かやうのためしは、武家にはある物なり。おどろきおそるゝに足ずとはいひながら、他所へ披露はせさせず、＊隠密してありしかども、後に聞えて、評議あり。信形此頃武篇の名、世にたかく、むかふ所軍にかたずと云事なければ、武勇に慢をおこし、敵方には手足もなきものゝやうに思ひあなどり、＊家人＊原も同しくほこり、＊慢心を起せし故に、かゝる妖怪をもうけたり。是より信形心だて、＊上気になり、分別あしく、軍法の備もちがひ、危き怪我をいたし、終に＊信州＊上田原の軍に打死しけるも、心のたがひし故なりとかや。

○板垣信形　板垣信方。？～天文一七年（？～一五四八）。諸記で信形としているのは誤り。塩山向岳寺の署名寄進状には信方とある。板垣家は代々武田家の族臣。信方は天文一一年（一五四二）から諏訪郡の城代。晴信の治世のはじめ、補弼の良臣と称されたものの一人で、信虎の時代から勇名があった。戦死については天文一六年（一五四七）八月二四日に上田原で討死というのは誤り。天文一七年（一五四八）二月二四日に信州塩田原で討死（『甲斐国志』九六）。「板垣信形弓矢を取りて、近国にかくれなき、名を得たる能き侍大将なれ共、一ツの瑕には、我同心被官の申す事を、取上げ給はず候事、今に始めず……板垣信形の、余り心武過ぎて、内衆の申す事を、取り上げられざる故なり」（『甲陽軍鑑』品二四）。「板垣信形、笛吹峠のこなた、かる井澤に十一月迄罷有同野陣に、仮屋形をひろく作り、十月六日の始の合戦に手にあはざる衆、手柄の武士ともにも、膳三膳或は二膳、赤椀にて振舞、又手にあはざる人々には、黒椀にて精進飯をくれらるゝ、是を他国にて、信玄公なされたると、さたあり、板垣信形短気なる人にてかくのごとし」（『甲陽軍鑑』品二六）。「天文十六年八月二日辰の刻に、晴信公甲府を御立あり……扨信州上田原へ出、八月廿四日辰の刻に、甲府方より合戦を始むる、武田の御さき、板垣信形なり……扨板垣信

形弓矢巧者の侍大将なれ共、当末の正月より、分別うは気になられ、備悉く違候故、味方を引はなれ、敵の敗軍して、其後又来るべき方へ行て、しかも備のおもてにて、頸を実検有所へ、村上方寄懸一戦を始むる、さすが板垣殿、近国に名を取たる仁なりといへとも、油断致され候故、家中に弓矢巧者の武士とも、上を学ぶ下なければ皆油断して、敵にしかけられ、あはてゝ得道具を取、備を立る事もなき間に、ぶへん仕なれたる、信濃武者、すきもなく懸つて追くづし、床几に腰を懸てゐられたる、板垣信形の馬を引よせ、のらぬまに敵五六人みかたの中へ入乱り、板垣殿出立を、内々みしりたるとおぼへて、左右むかふより、懸りてやりつけ、ころび給ふと一度に鑓の下をくゞり、板垣殿の頸を取……味方も雑兵ともに、七百余り討死の中に、名誉の侍大将板垣信形討死なり、晴信公も、うす手を二ケ所おはせられ候……天文十六年丁の未八月廿四日、信州上田原合戦とは是なり」（『甲陽軍鑑』品二八）。○**甲斐**　現在の山梨県。○**信玄**　武田信玄。既出。巻一―三。四―三。五―一。五―二。六―一。大永元年～天正元年（一五二一～一五七三）。戦国時代の武将。信虎の長子。名は春信。信玄は法名。「永禄九年禁裏より大僧正に任ぜられ、法性院信玄と号す」（『寛政譜』）上洛を志し、織田信長と雌雄を決しようとして三河の野田城攻囲中に病を得、伊那郡駒場に没。「天正元年四月十三日卒す。年五十三」（『寛政譜』）。○**武勇**　既出。巻一―三、六―一。武術に優れ、勇気があること。「武勇　ブヨウ」（饅頭屋本）。○**軍**　「軍　イクサ」（諸節用集）。○**重寄**　信頼。○**楚忽**　「Socot　ソコッ」（日葡）。「楚忽　ソコツ」（饅頭屋本・易林本）。○**山伏**　修験道の行者。修験者。山に伏して苦行し、霊験を修得する者。多くは紀州熊野の大峰で修行し、役の行者の流れを継いでいる。後には天台・真言の両宗に属し、前者を本山派、後者を当山派とよんだ。天台では三井寺、真言では醍醐寺が統轄した（『広説佛教語辞典』）。○**斎料**　「Toqirio　トキリャウ」（日葡）。○**眼ざし**　「Manacozaxi　マナコザシ」（日葡）。○**長**　「長タケ」（諸節用集）。○**骨あれて**　骨太でごつごつした様子。○**客僧**「Qiacuso キャクソウ」（日葡）。○**出羽国**　現在の山形、秋田両県の大部分。羽州。○**羽黒山**　山形県のほぼ中央にたたずむ出羽三山のひとつ。修験道諸派の中でもとくに苦行性の強い羽黒修験が形成された。中世以来、羽黒山は天台・真言・臨済・念仏の寺々が一山を形成して月山の司祭権を握り、湯殿山の祭祀権を別当四ヵ寺が共有し、衆徒は羽黒に入峰した。寛永一八年（一六四一）に羽黒一山はことごとく東叡山末となり天台宗に帰入した（修験道辞典）。○**行人**　修験道の行者の一種。湯殿山では肉食・妻帯をしないが、頭髪や髯をのばしている。一千日または三千日にわたって苦行を行うか、または木食行を行う。水垢離をとり、手灯行（油を掌に盛って灯心に火をつける）などを行う。修業完成後に諸国に散る（広説佛教語辞典）。○**大峯**　奈良県吉野山から和歌山県の熊野に至る紀伊半島の中央に約四三里にわたって長くのびる山系。古来修験道の根本道場として知られている（中略）。大峯山は伝説では役小角（えんのおづぬ）が修行して金剛蔵王権現を感得し、のちに平安時代になって醍醐三宝院を開いた聖宝が中興した修験道場といわれている。（中略）なお、教義の上では大峯山は金剛界・退蔵界の曼荼羅とされ、この山で修行することによって即身成仏しうるとされている（修験道辞典）。○**葛城**　古くは奈良・大阪両県境の金剛山地から、大阪・和歌山県境の和泉山脈に及ぶ逆L字形の山系の総称。葛城山は山林修行者の道場でもあり、役小角をはじめ数多くの山林修行者があつまった。本山派では、法華の峰と称して春に葛城修行を行い、当山派では秋の逆峰（吉野から熊野へ向う峰入）のあと葛城に入峰した（修験道辞典）。○**熊野**　紀州（和歌山県）の熊野坐神社（くまのにます）（本宮）・熊野速玉神社（新宮）・熊野夫須美（ふすみ）神社（那智）の三社の総称。吉野・大峯山とともに古代以来の代表的な修験霊場（修験道辞典）。○**年ごもり**　大晦日の夜から元日の朝にかけて、神社や仏閣などに参籠すること。○**一夏**　四月一六日から七月一五日に至る夏時九〇日の安居の行を修行する間。昔の、四・五・六月の三か月間。九旬九〇日間をいう。この間、僧は寺院に定住して、外出せず修行に励む（修験道辞典）。

○**御房**　僧または寺の敬称。「Gobo　ゴバウ」（日葡）。○**同行**　心を同じくして、ともに仏道を行ずる者（広説佛教語辞典）。○**螺の貝**　法螺。山伏のたずさえる道具の一つ。修験道ではもと悪獣などを追い払うために用いたが、重要な法具として山中修行ばかりでなく、法会にも用い、二〇～四五センチメートルに及ぶものもある（広説佛教語辞典）。○**よせ貝**　寄せ貝の意。○**先達**　修験道の行者の一種。修験者が峰入りの時、同行に先立って案内する者。湯殿山では、行人とは異なり、妻帯して、先達の地位は父から子に受け継がれる（広説佛教語辞典）。「先達　センダチ」（饅頭屋本）。○**非時**　非時食の略。正午以後にとる食事。時間はずれの食事（広説佛教語辞典）。○**弥二郎**　板垣信憲。生没年未詳。板垣信方の男。信方の死後、諏訪郡の郡代。『甲陽軍鑑』に天文二一年（一五五二）、罪を蒙り扶持・下役を取り上げられ殺害とあるが、弘治年中の印書があるので誤り（『甲斐国志』九六）。「板垣弥次郎、御旗本、前備四手の内にて候へ共、時田合戦にて、手に合ざる故、信玄公御腹立ましく〳〵て、御書立てを被ㇾ成、板垣弥次郎方へ、指下され候……其の後弥次郎、御成敗あり」（『甲陽軍艦』品三一）。○**被官**　「Fiquan　ヒクヮン」（日葡）。○**中間**　「Chuguen　チュンゲン」（日葡）。○**五三人**　数人。○**数盃**　「Sufai スハイ」（日葡）。○**芳志**　「Foxi　ハゥシ」（日葡）。○**奇瑞**　「Qizui キズイ」（日葡）。○**一尺**　三〇・三センチメートル。○**魚鱗**　陣形の一つ。魚のうろこの形のように、中央を突出させ、人の字の形にしたもの。「魚鱗鶴翼　キヨリンクワクヨク　陣取　チントリ　也」（増補下学集）。○**迚もの事に**　このついでに。○**薯蕷子**　植物の腋芽（えきが）で、栄養物質の貯蔵によって球状に肥大し、成熟すると地上に落ちて新しい植物体となるもの。特にヤマノイモにみられる。○**鶴翼**　陣立ての名。ツルが翼を広げたような形に兵を並べて、敵をその中に取り込めようとする陣形。○**曳々**　鬨（とき）の声。○**応々**　泣いたり大声をあげて騒ぎ、わめくさまを表す擬声語。○**颯と**　物事や動作が急激迅速になされるさま。颯には風のふくおと、はやての意味がある。風のようにはやい状態をあらわす擬態語。○**譜代**　代々ある主家に仕える臣下。○**対治**　「対治　タイヂ」（易林本）。○**先手**　全軍の先頭に進む軍勢。二陣・三陣・本陣・後詰など諸備に対して、一番先の備（そなへ）。○**身命**　「Xinmeo　シンメャゥ」（日葡）。○**殿**　「殿　オクル、」（倭玉篇）。○**軍法**　いくさの手だて。戦術。戦法。○**鋒先**　戦闘の勢いや士気をいう。○**うけ太刀**　相手が打ち込んでくるのを刀で受けとめたり、支えとめたりすること。「Vqedachi　ウケダチ」（日葡）。○**ほの〴〵**　夜が明けるさま、あるいは、朝になるさま。「Fonobono　ホノボノ」（日葡）。○**隙**　「隙　ヒマ」（倭玉篇）。○**觜**　「觜　クチハシ」（倭玉篇）。○**翅**　「翅　ツハサ」（倭玉篇）。○**異類**　違った種類。ことに正身の仏神にあらぬ妖怪の類や、人間でない鬼神・畜生の類をさしていうことが多い。○**異形**　異類と並べて、人の形でない妖怪の類にいう。○**いづち**　どちら。どの方角。○**前後もしらず**　何もかもわけがわからなくなるさま。○**労れ**　勞　ツカル（倭玉篇）。○**精進**　精進物・精進料理の略。○**膳部**　膳に載った一式の料理。食膳。○**何条**　「Nangio　ナンヂョウ」（日葡）。どうして、なぜ。○**隠密**　「Vonmit ヲンミッ」（日葡）。○**家人**　親戚関係とか主従関係とかのつながりによって、ある家、または、一族に所属する家来、または、人。「Qenin ケニン」（日葡）。○**原**　人を表す名詞に接し、その仲間の意、また、その程度の者の意を表す。軽んじた気持ちをもって用いることが多い。○**慢心**　高慢な心。「Manxin　マンシン」（日葡）。○**上気**　とかく一時の気分に浮かれて、落ち着きのない性質や、そのさま。思慮判断に欠けたさま。軽はずみ。○**信州**　信濃国の別称。○**上田原の軍**　上田原は現在の長野県上田市大字上田原・大字下之条一帯。天文一七年（一五四八）二月甲斐の武田晴信と、信濃の村上義清が激戦を展開した。二月一四日この合戦で武田方は板垣信方・甘利虎泰・才間河内らの重臣をはじめ多くの将兵を失い、武田晴信自らも負傷し、大敗した。この合戦によって村上氏は武田氏の侵攻を一時食い止めることができた（『長野県の地名』日本歴史地名大

系20）。

【余説】 浄瑠璃の人形が夜中に戦をするという話は『西鶴諸国はなし』四にあり。また『太平記』五には、相模入道が田楽師たちと酒宴を催した際、侍女が覗くと田楽師ではなく妖怪の類が山伏姿で現れたようであったという話がある。

○亡魂を八幡に鎮祭る

＊寛永のはじめつがた、＊吉川某の家人、＊松岡四郎左衛門と聞えし者は、＊武篇にほまれあり。心ざししぶとく正直の＊武侍なり。しかるを、＊侍輩の＊讒によりて、＊打首にして殺されたり。すでに死期にをよびて云やう、口惜くもあらぬ。讒言に依て命を失なふ事は、ちからなし。せめて腹をだにきらせず、＊打首にせらるゝこそ無念なれ。来世たましゐきえて果なば、＊是非なし。きえずしてある物ならば、此うらみは報ずべきものをとて、＊歯がみをして、首をぞ討れける。

七日の後、四郎左衛門が＊亡霊あらはれて、生たる時の姿のごとし讒せし者は、親子ながら打つゞきて死絶たり。それのみにかぎらず、道に行あふともがら、男女老少、立どころに死するもの、一千余人に及べり。僧をやとふて、経をよみ、種々に＊とふらへども、しるしなし。埋みたる＊塚をかざり、＊陰陽師に仰せて、まつらせらるれども、しづまらざりければ、社をつくりて、＊八幡と号し、祭を初めて祝ひ鎮めしより、亡魂のうらみとけて、そのゝちは、ながく静まりぬ。

○**寛永**　一六二四～一六四三。○**吉川某**　吉川氏。ここでは、吉川広家か。広家は吉川元春の三男。毛利氏の武将として各地を転戦した後、慶長六年（一六〇一）周防岩国城主となった。三万石。寛永二年九月死去。吉川氏は周防国岩国藩主。藤原家南家の一支流で、駿河国入江荘吉河邑（静岡県清水市）に居館を構えた経義を始祖とする。在地名により吉川氏を称した。後、吉川興経の養嗣子として毛利元就の次男元春をむかえ、吉川氏は毛利氏の未家となった。元春は小早川家をついだ弟隆景とともに「毛利両川」と称され、主家毛利氏を補佐して中国平定に尽力。その子広家も、関が原の戦いでは徳川家康に内応し、西軍の将となった毛利氏に周防・長門（山口県）二カ国を確保した。江戸時代には吉川氏は宗家毛利氏の家老格として周防岩国六万石を領し、幕末にいたる。○**松岡四郎左衛門**　未詳。○**武篇**　武芸に携わること。武勇で名を挙げること。また、その人。○**武侍**　軍事に携わる者の称。都人から見て情がこわく、粗暴な者という印象がつきまとう。武士や兵にくらべて「もののふ」は、そんな固有の気質を意識して用いられる場合が多い。「Mononofu モノノフ」（日葡）、「物夫　モノ、フ―武士―」（下学集）、「武士　モノ、フ、兵人同」（易林本）。○**侍輩**　芳輩。朋輩。同じ程度の経歴や年齢、資格で、同じ主君に仕えたり、同じ勤務に就いている対等の関係の仲間。同じ身分にある友達仲間。○**讒**　讒言に同じ。事実を曲げたり、でっち上げたりして他人を悪く言うこと。また、そのことば。○**打首**　近世の刑罰の一つで、斬首の刑の一般的な呼称。○**是非なし**　是か非かを論ずるまでもなく、はっきりしているさま。当然である。いうまでもない。○**歯がみ**　歯噛。歯ぎしり。多く無念をこらえるさまにいう。「Fagami 怒って歯をむき出すこと。または、眠っている時に我知らず歯をむきだすこと」（日葡）。○**亡霊**　亡くなった人の魂。亡魂。○**とふらへども**　弔（とふらふ）。死者の霊を慰め、法要を営むこと（とぶらひ）。法要や読経をして、死者の後世安楽を願う（とぶらふ）。○**塚**　墓所。本来「つか」の語は、墓所として盛り土されたものをさした。○**陰陽師**　古代、中務省所管の陰陽寮・大宰府・鎮守府などに置かれた職員。天文暦数を算定すると同時に、卜筮（ぼくぜい）や吉凶を占った。陰陽道の普及につれて、中世では公武ともに用い、士御門家が陰陽師の正統となり、近世、諸国の陰陽師をも統括した。「陰陽師　ヲンヤウジ」（饅頭

屋本）。○**八幡**　岩清水八幡宮か。「岩清水八幡宮」は、京都盆地の西部、山城と河内の接する辺りの淀川左岸の男山に鎮座する。当宮は神宮寺であるが、護国寺が一山を管掌し、政令はことごとくここから出る。重職は僧侶が占め、神主・俗官はその下に従った。その結果、神前に魚味を供さず、内陣のことも僧侶が管し、神前読経はもちろん、内陣の装束・器具も仏式が用いられた。

【出典】『本朝故事因縁集』五の百二十一〈富士2〉。

○杉田彦左衛門天狗に殺さる

＊武蔵国榛沢郡に＊杉田彦左衛門といふ者あり。＊心操不敵にして物におそれず年二十のころより＊日光の今市、＊月毎三たびの市に必らず行むかひ、帰り足には＊山賊して道行人を追たをし、或はは ぎとり或は打ころし、家の内財宝豊かなり。十七八人ゆる〳〵と世をわたり、不足なる事なし。

ある年の九月に今市より、馬にのりて帰るに＊板橋のあひだにして、＊日光山の＊孫太郎といふ天狗あり。その身を化して長九尺ばかりの山伏となり、大道に立ふさがる。乗たる馬は身ぶるひして、すくみてすゝまず。彦左衛門、刀の反をまはし柄に手をかけ、汝は日光の孫太郎かその道あけよ。馬を通さんといへば山ぶしかたはらに退さまに、さもあれ。来年＊四月十五日には必らず汝をとるべきものをとて、たちまちにすがたを見うしなひけり。彦左衛門元来したゝかものなりければ物ともせず駒に＊策うつて宿に帰る。何となくすさまじきやうにおぼえて、それよりは。日光へもゆかず。年も暮て春になり二月の末つがたより心地よろしからず。かなたこなたするあひだに四月になりつゝ、いよ〳〵わづらひおもく。つゐに十五日にいたり、くるしみ甚はだしく大熱狂乱して死たり。＊国西寺の＊国道和尚を＊引導の師として、＊稲荷の家より葬礼をいたしけるに風あらく雨の降事はうつすがことく、＊墓所ちかく成しより、いなびかり若りにして、＊はたゝ雷すでに棺のうへにおちかゝるやうにおほひて空に声ありて、その尸骸をこなたへ御わたしあれといふ。和尚は一たび契約して＊師旦となれり。たとひいか成事ありとも此屍はわたすまじとて＊菊一文字の脇指をぬきけるを。いかづちおちかゝり。脇指をもぎとり。ねぢゆがめて去ければかばねはとられもせず。空晴たり。心しづかに引導し。跡よく弥とふらひ申されけり。その脇指はなを今もこの寺の＊什物なり。後に和尚の語られしは杉田彦左衛門はその心ね。ふてきにして力つよきしたゝかものなり。をのれがつよき心よりて、人をは物とも思はず、＊仏神＊天たうの＊冥慮をも慙おそれず、ほしゐまゝに悪行をいたし、人をころし財物をうばひ、只＊よこしまをもつて身のかざりとす。此故にかゝるあやしき事をも感じけり。＊妖は妖よりおこるといへり。＊邪気勝ときは正気うばふとかや。我が心すなはち邪気のもとゝなる。故にやがて正気をうばゝれて＊妖怪にあふなり。＊まなこに一翳あれば空花散乱すといへり。＊虚空もとより花ありて散にはあらず。まなこにやまひありて、こくうのあひだに花のちるを、みるがことし。正気＊正念の時には外の＊妖邪は犯す事なし。＊仏法の中にをしゆるところ世間の＊五塵＊六欲の＊境界にこの＊心法をうばゝれて、ゆきがたなくとり失なひ、常にまよふてくるしみをうく。そのこゝろをとりもどしてとゝめえたる所にこそ＊霊理ふしぎの＊正見＊正智は＊出生すべけれ。此正念を＊万境にうばゝれて蝉のぬけがらのごとくならばもろ〳〵の妖邪は、しば〳〵犯すにたよりちかし。たとへば守りおろそかなる家には盗人の入易きが如し。又それ天地＊広大の中には、＊奇怪ふしぎの事あるまじきにあらず人に＊魂魄あり、その＊精気＊正心なれは＊正理にして非道なし正念にして＊非義なし＊徳をのづから備るをもつて妖邪をかさず。みづからおこなふて正心正念を返しもとむる事のかなはざる＊愚人は神に祈り仏を頼みて、うやまひたうとひて＊信を生ずれば＊神力＊仏力に依てをのづから正念に成なり。

そのかみは関東がた、＊人死すれば火車の来りて戸をうばひとり、ひき割て大木の枝に懸置たる事も、おほかりしを今は仏法のをしへひろく、諸人みな後世をねがひ仏神をたうとひふかく信心をおこし、正直正念に成たる世なれば火車の妖怪も稀に成侍べり。只おそるべきは我らの悪行まうねんなり。地ごく＊鬼畜も余所よりは来らずみづから招く＊罪科なり此たび仕損じては二たび返らぬ一大事ぞふかく信じてねがひもとむべきは＊仏果＊菩提の道なりとぞねんごろにすゝめられける。

○**武蔵国榛沢郡**　「和名抄」所載の郷。同書名博本に「ハンサワ」の訓がある。諸説はいずれも現埼玉県大里郡岡部町の榛沢・岡部を中心とする一帯としている。元亀二年（一五七一）頃、半沢郡で本山修験がさかんとなる（『埼玉県の地名』日本歴史地名大系11）。○**杉田彦左衛門**　未詳。○**心操**　心の動き。気だて。性格。「心操　コヽロバセ」（易林本・合類）。○**日光の今市**　現栃木県今市市。行川流域には日光山を開いた勝道にかかわる伝承地名が残るので、勝道は行川を遡行して山久保の谷を出て大谷沿いに日光へ入ったとも考えられる。今市瀧尾神社も勝道の日光山滝尾権現社創建と同時に建てられたとの由緒をもつ。中世では現在の日光から今市市域に残る頼朝街道は、日光山から七里・野口、千本木・明神・小代を通り、宇都宮方面へとのび、日光山と鎌倉を結ぶだけでなく、各地から日光山へ詣でる信仰の道でもあった。また、今市村では、会津など奥羽南部と関東を結ぶ物資流通の拠点で一七世紀後半から、会津街道沿いの村民は木製品・藁加工品などを持馬に積んで運び込み、帰路に米や生活必需品を積んで売り込む仲付稼を行った。一・六の六斎市も立ち、穀物問屋が多かったという（『栃木県の地名』日本歴史地名大系9）。○**月毎三たびの市**　三斎市のことか。毎月三回定期に開かれた市。中世の市は三歳市が多かった。○**山賊**　山立。山中に根拠を構える盗賊。山盗人。「山ダチ　［和訓栞］、ヤマダチ。徒然草に見ゆ。山賊を云。山発の義なるべし。山獵を好むもいふ。山だちは山ではてるといふ」（俚言集覧）。○**板橋**　板橋村。今市市板橋。壬生通の宿場。北は土沢村、東は河内郡木和田島村、南は文挟宿。文挟宿までは三三町と近いため、日光方面へは今市宿まで、江戸方面へは当宿から文挟を通り越して鹿沼宿まで往復継ぎ立てた。三光神社・栖克神社がある。旧板橋宿の中央にある高野山真言宗福生寺には、板橋将監の位牌がある（『栃木県の地名』日本歴史地名大系9）。○**日光山**　日光市の大部分を占める古代から山岳信仰の霊場として開かれた地域および宗教施設の総称。狭義には二社一寺の境内地である。現在の山内をいうが、一般的には日光山内を中心に、中宮祠・湯元や日光連山、中禅寺湖畔を含む広大な地域をさす。山中とよばれることもあった（『栃木県の地名』日本歴史地名大系9）。○**孫太郎**　栃木県下都賀郡駒場村岩舟山高勝寺で祀られているらしい。『大日本地名辞書』「岩舟山」の項目に、「国誌云、岩舟山は宝亀年中…是は当山の奥の院、地主権現の祠あるを、近隣の俗は孫太郎天狗と唱えて、昔は折ふし神かくしと云ふ事ありしといへばなるべし…」とある。○**策**　「策　ムチ」（黒本本）○**四月十五日**　東山今熊之祭・宇治離宮祭・槙嶋祭・結夏・五山秉仏（『日次紀事』）。○**国西寺**　未詳。○**国道和尚**　未詳。○**引導**　（仏）迷っている衆生を導いて仏道に入らせること。また、死者を済度（仏・菩薩が苦海にある衆生を済くい出して涅槃に度らせること。法を説いて人々を迷いから解放し悟りを開かせること）するため、葬儀の時導師が棺前に立ち転迷開悟の法語を説くこと。○**稲荷の家**　『新編埼玉県史』によると「埼玉県では普通イッヶとかイッキとかいうことばで本分家関係を表現する。この本分家関係で社を祀る同族も多い。県内では同族で祀る神をもっていても、自宅の敷地内には屋敷神を祀るという家が一般的。地方によって多少異なる。祀る社の神は、稲荷・諏訪・お手長様（天手長雄命）・天狗（大山祇命）など様々であるが、伏見稲荷大社の影響も強く、稲荷が多い。祭場は同族の本家筋や、その社の勧請などに由来する家で祀るのが一般的で、敷地内や所有する山林などに石宮や木造の宮を建

てている」。「武井稲荷と呼ばれている社が大里郡岡部町後ろ榛沢にあり、武井イッケで祀っている。この稲荷には武井イッケの人たちだけでなく、近所の人が事ある毎に参拝し、病気平癒の祈願などでお百度参りもされている」とある。○**墓所**　既出。巻三―七。「墓処　ムシヨ」（易林本）、「墓所　ムシヨ」（書言字考）。○**はたゝ雷**　はたたがみ（霹靂神）はたはたがみの約。はたたく雷。はげしい雷。はたかみ。「はたた」は擬音語。激しく鳴りとどろく雷。○**師旦**　師檀か。（仏）師僧と檀那。寺僧と檀家。「師檀」（易林本）、「師旦　シタン」（合類）。○**菊一文字**　一文字則宗およびその子助宗の打った太刀に、特に菊紋を切ることを許されたもの。銘には菊紋だけで、一の字は切らない。これを後鳥羽上皇の作とみる説と、一文字親子の傑作刀に特に下賜されたとみて、一文字親子の作とみる説がある。現今では前説を採っているが、則宗を菊一文字則宗と呼ぶことは後説を採っていることになる。○**菊の御作**　『承久記』では次第と次延、『承久軍物語』では家正という刀工に刀を作らせ、上皇は焼きいれをされたとあるが、『増鏡』では刀剣の鑑定に長じたことだけを挙げている（日本刀大百科事典）。○**什物**　①日常用いる器具。特に、寺院や僧団の所有する種々の師具。②由緒ある秘蔵の器具。宝物。什宝。○**契約**　「契約　ケイヤク」（易林本）。○**仏神**　全知全能を備えている超越者。「Butjin　ブッジン」（日葡）。○**天たう**　①天地自然の道理。天の道。天理。②天地を主宰する神。天帝。上帝。また、その神の意思。③太陽。日輪。てんとうさま。④天体の運行する道。天。空。天空。⑤天上界。⑥仏語。六道・五道の一つ。欲界六天と色界・無色界の総称。天上界。天界。『増補下学集』には「天道神　牛頭天王の異名也」ともある。○**冥慮**　人間には感知することのできない、神仏の考え。「冥慮　ミヤウリヨ」（易林本）。○**よこしま**　「よこさま」の母音交替形。道理に外れているさま。○**妖**　「妖　ヨウ」（合類）。○**邪気**　「邪気　ジヤキ」（恵空編節用集大全）。○**妖怪**　「妖怪　ヨウクハイ」（合類）、「妖怪　ヨウクワイ」（恵空編節用集大全）。○**まなこに一翳あれば空花散乱す**　「まなこ」は、「目」の「子」の意。①黒目。漢文訓読語で、和歌や女性の手になる和文には用いられにくい語であった。②黒目と白目全体としての目。眼球。③視野。視界。「翳」おおいかくすこと。かげになること。かげり。「翳　ヱイ」（合類）。「翳眼」は、かすんでぼんやりとしか見えぬ目。比喩としては、煩悩の迷いのために曇って実相のわからぬ状態の目をいう。「空花」は、仏語。虚空花の略。眼病の者が、空中にちらちらと花のような幻像を見るのをいう。実体のないものをさまざまに妄想することのたとえ。「一翳眼ニアル時ハ、空花ミダレヲツ」（『沙石集』七）、「一―翳在（エイレハ）空華乱墜（ケランツイ）」（『定本禅林句集』）、「一翳眼にあり空花乱墜す」（『土井本太平記』）を参照するか。「Ichiyei manaconi areba, cu-qua rantçui su（一翳眼に在れば、空花乱墜す）眼に目やにがあったり、目がうるんでいたりすると、そうでないものもそうであるかのように見せるものである。文書語」（日葡）。○**虚空もとより花ありて散にはあらず**　「虚空」は、①仏語。梵語 akasa 他をも妨げず、また他にも妨げられず、いっさいの法を受容するもの。空であること。また、その世界を虚空界という。②大空。「虚空　コクウ」（易林本）。「元来万劫煩悩の身を以つて、一種虚空の塵にあるを本意とは存ぜざり」（『土井本太平記』）を参照するか。○**正念**　仏語。①正しい思い。正しい想念。邪念を離れて仏道を思い念ずること。八正道の一。②浄土門でいう、一筋に仏を念ずる心。仏の救済を信じて疑わない心。一心正念ともいい、浄土宗鎮西派では、一心を他想のないこと、正念を疑慮のないこととし、西山派では、一心を至心、正念を信楽とする。また、浄土真宗では、一心・正念ともに信心の意とする解と、一心を信心、正念を称名念仏とする解がある。「正念　シヤウネン」（易林本）。○**妖邪**　災いをもたらす悪気。あやしく邪悪であること。また、そのさま。○**仏法**　漢語。仏の教え。仏教。「佛法　フツホフ」（易林本）。○**五塵**　目・耳・鼻・舌・身の五根で、色・声・香・味・触のこと。人間の本性を汚染し煩悩を起こさせる。「五塵　ゴヂン」（合類）。○**六欲**　①凡夫が異性に対してもつ六つの欲望。色

欲・形貌欲・威儀姿態欲・語言音声欲・細滑欲・人相欲の六つ。②眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚器官から生ずるさまざまな欲望。「六欲天　ロクヨクテン」（合類）。○**境界**　力の及ぶ範囲。与えられている範囲。領域。「境界　キャウガイ」（易林本）。○**心法**　心。心所におなじ。心の法。心というあり方。心のあり方。心からなる存在一般。心および心のはたらきの一切。心性。自性清浄心。根本の原理としての心。一心。○**霊理**　素晴らしい道理。霊験がある道理。摩訶不思議な道理。○**正見**　正しい知見。「正見　シャウケン」（易林本）。○**正智**　真理にかなった智恵。正しく法の真諦を照らす智恵。○**出生**　①この世に生まれ出ること。②その土地の生れであること。③生まれつき持っている性質。④そもそものいわれ。「出生　シユツシヤウ」（易林本）。○**万境**　五塵六欲を含むすべての対象。否定的に使われている。「万境　バンキヤウ」（恵空編節用集大全）。○**広大**　漢語。広く大きいこと。空間的な大きさをいうほかに、慈悲・恩恵などの偉大さをほめていうに用いることが多い。「広大　クハウダイ」（饅頭屋本）。○**奇怪**　漢語。常識や人知では思いもよらぬ事がおこるさま。不思議なこと。ありうべからざることが起ったさま。「奇怪　キクワイ」（易林本）。○**魂魄**　漢語。精神の優れているさま。思慮深いさま。「魂魄　コンハク」（諸節用集）。○**精気**　「Xeiqi セイキ　生命を支える活力・すなわち、内面的な力」（日葡）。○**正心**　正気正念に同じ。○**正理**　①正しい道理。すじみち。②論理。「正理　シヤウリ」（易林本）。○**非義**　漢語。義に背くこと。道理に外れること。「非義　ヒギ」（伊京集・易林本）。○**徳**　道を修めた者に備る力。人格。○**愚人**　漢語。おろかな者。馬鹿者。「愚人　グニン」（易林本）。○**信**　仏語。梵語 sraddha の意訳。心の境地の一。対象に対して心を清らかに澄まし、汚雑の念いっさいを去ること。「信　シン」（合類）。○**神力**　①神通力に同じ。②神の威力・神の威光。「Xinrigi シンリキ」（日葡）。○**仏力**　仏の不思議な功徳のある力。「Butrigi ブツリキ」（日葡）。○**人死すれば火車の来りて尸をうばひとり、ひき割て大木の枝に懸置たる事**　「火車」は、仏語。火炎をあげて、燃える車。『大智度論』一四によれば、生前に悪事を犯した者を乗せて地獄へ運ぶ車とされ、また『観仏三昧経』五によれば、地獄にあってそれに死者を乗せ、生前の諸悪行を責める火の車ともされる。「尸」は①死骸。なきがら。②特に遺骨をいう。「尸　カバネ」（易林本）。○**鬼畜**　鬼や畜生の類。ともに人情を解さないものなので、情を知らぬ残酷な人をたとえていうのに用いる。「鬼畜木石　キチクボクセキ」（易林本）。○**罪科**　罪と科。道に反したり法を犯したりする悪事と、他から非難されるような過失。「罪　ツミ」（諸節用集）、「toga トガ」（日葡）。○**仏果**　仏道の修行によって徳を完成し、究極的な悟りの境地を実現して仏に成ること。「佛果　フツクワ」（易林本）。○**菩提**　仏語。梵語 bodhi の音訳。意訳して「道・智」、また「覚」。仏果とそれに至る因道との二面からいわれる。いっさいの煩悩を離脱した、迷いのない状態。「菩提樹　ボダイジユ」（易林本）。

【出典】『奇異雑談集』四―一、四―三〈富士2〉。

【余説】『因果物語』片仮名本下巻十一。『因果物語』平仮名本二―十七。

冨士氏の指摘するように、本話は『奇異雑談集』四―一「越後上田の庄にて葬の時雲雷きたりて死人をとる事」の内容と類似している。『奇異雑談集』では、「檀那庄内の人死す。その長老いんだうをなす。葬礼すでに山頭にいたるとき。電雷はなはだなりて。…大雨ふること…」とあるように、地域共同体の中で死人を弔う場面で雷が鳴り響く点（場所も山で大雨）、さらに、天狗ではないが黒雲が死体をさらおうとする点、葬式を取り仕切る者が強気に立ち向かい死体を取り返す点なども共通する。しかし、『奇異雑談集』では死人の性格については言及されていないのに対し、『狗張子』では死人の性格を「ふてきにして力つよきしたゝかものなり」とし、人命を脅かすことを厭わず山賊をし安楽に暮らしていた報いとして、主人公は自らの命を落とすことになる。本話では、主人公の強欲身勝手な性格を具体的に描くことで、

『奇異雑談集』より因果応報譚としてのリアリティーを持たせていると思われる。

なお、『因果物語』片仮名本（寛文元年刊）・平仮名本（万治頃刊）では、濃州八屋の僧が死後、火車に屍骸を奪われるという話がある。僧の屍骸が奪われるのは『因果物語』のみで、『奇異雑談集』にも火車の記述はあるが、僧ではない。典拠に近いのは『因果物語』平仮名本か。

第七巻

今川駿河守か細工人新に唐船を造る事

蜘蛛塚の事

飯森兵助陰徳の報付土井が妻邪見の事

五条の天神付入江寿玄斎疫病を癒す事

鼠の妖怪付物其天を畏るゝ事

死後の貞烈

狗張子惣目録終

狗はり子巻之七

○細工の唐船

＊永享四年九月、将軍＊義教卿富士山＊御詠覧のため、＊東国＊駿河の国に＊進発を＊催さる。此事前年より思召立れ、駿河の国主＊今川駿河守範政に、かねて仰付らるといへども、執権＊斯波＊細川＊畠山等、各諫言をすすめて、今天下しばらく武威の＊化に＊属すといへとも、＊大乱の後にして、国をとろへ民疲れて、しかも＊南方の強敵、いまだことゞ〳〵く亡びず、かゝる時節は＊好事もなきにはしかず。たゞこひねがはくは、おぼしめしとまり給へと、たび〳〵いさめ申すにより、延引に及べり。しかれども、多年の御深望たるにより終に思召止らず。

駿河守は、此事前年より承知しておもふやう、将軍はじめて此地にきたり給ふ、饗応よのつねにしてかなふべからずと思案して、家臣共をよびあつめいひけるは、来年九月の比、京都の将軍富士山御詠覧のため此地に来臨あるべきよし、先だつて＊御教書あり。しかるに、此請待いたすべき、御主殿の前に大きなる泉水あり、此水の上にて、何かめづらしき＊御慰の事はあるまじきやと、せんぎ有ければ、＊末座に一人ありて、それがし細工に妙を得たり。あはれ一年の御いとま給らば、国本へまかり帰り、何ぞ御なぐさみにもなるべき事工夫仕らんと申ければ、駿河守、それこそやすきあいだの事、国にかへりいかにもして細工仕り見候へとて、いとまをたびけり。細工人よろこび国にかへり、＊一間所へ引きこもり、たゞひとりあけくれ、工夫をつゐやしてこしらへける。

すでに同年九月、将軍駿河守が館に御入りあり、やがて御主殿に請待し、恭敬の心をこたらず、珍膳佳肴＊数をつくして饗応す。将軍も感悦甚しく、夜は舞楽の宴を催し、昼は＊高亭に登りて富士山を詠覧し給ひ、

＊みずはいかに思ひしるべきことの葉も
及ばぬ富士と兼て聞しも

かく詠じ給へば駿河守返哥

＊君がみむ今日のためにやむかしより
つもりは初し富士のしらゆき

かくて将軍の御機嫌を見合、かの細工人に仰せて、細工の物を取よするに、何とはしらず、ひとつの大きなる箱を献上す。将軍これはいかにとて、ひらかせ見給ふに、長さ＊三間横＊五尺ばかりの、結構にこしらへたる唐船にてぞありける。むかし＊隋の煬帝の数千の大

舶を作り、あまたの宮女もろ共に舞楽を奏し棹歌して、かの＊西園の名木奇花をたづねしありさまも、かくやおぼへておびたゝし。＊龍頭鷁首あざやかに、＊玉楼＊金殿＊かゝやけり。すなはち前なる泉水に＊泛しかば、数の人形動きいで、＊桂の櫂蘭の槳、滄海に＊摯さして船うたうたふそのけしき、げにも巧に＊操り。

しばらくありて、色黒き人形共、横になしたる帆柱を、そろり〳〵と引あげておしたつれば、おほくのつなをたぐりつゝ、＊日よみのていとうちみえてまがくしする人形もあり。又年のほど七八十ばかり、これより＊明州の津まで、＊八百里海底にいりたる大石もやあるらん。又＊大風の変をあんじ、＊破軍＊武曲＊文曲のひかり、＊北斗のほしに、＊参商の二つの星を考へ、＊時変＊運気に心をくるしめ、＊凝然として立たる人形もあり。

さて、管絃のはじまると見えて、うるはしく装束したる伶人の人形、それ〳〵の＊楽器をもち、おもしろきふき物、鐘をならし太鼓をうち、＊六律＊六呂の調子をそろへ、＊太平楽を奏すれば、またうるはしき美人の人形五六十人、けつこうなる＊装束し、音楽の調子にあはせ舞蹈して、しづかに簾中に引入れば、又さも＊しほらしき＊から子の人形百ばかり、てんでに拍子うちそろへ、＊還城楽のさしあし、＊ばとうの上の＊ばちがへり、げにあり〳〵と舞ふたりけり。音楽躍歌の声、玉の＊やうらく風にひゞき、こがねの瓦は日にひかり、こゝろも言葉もおよばれず。凡五六百の人形、みなそれ〳〵のはたらきありて、一時ばかり芸をつくすとみへたりしが、そのゝちちいさき人形一人、帆柱のもとにて、何やらん＊火うちのやうなる物を取出し、二つ三つ打とおもへば、＊鉄炮の＊どうぐすりを入はねさせける程に、その音天にひゞきておびたゝし。＊数多の人形、ひとつものこらず打はらひ、唯泉水のしらなみのみぞ残りける。満座大きにおどろき、たゞ忙然とあきれたるばかりなり。将軍興をさましたまひ、かの細工人を召しけるに、彼鉄炮のさはぎに＊亡さりて、尋れともしれざりける。

これは＊いかさま、天下ふたゝび＊兵乱起りて、＊人民うせほろぶべき＊前表なんとみな人さたしあひければ、将軍も駿河守も、共に眉をひそめてふかく隠密すべき旨仰出されければ、その一両年の中は、さだかに知る人なかりけるとそ。

○**永享四年**　一四三二年。八・一七　足利義教、遣明船見物のため兵庫へ下向。九・一〇　義教、富士遊覧と称して駿河に向かう。九　足利義教に供奉した飛鳥井雅世が『富士紀行』を堯孝が『覧富士記』を著す。○**義教**　既出。巻三―七。足利義教　応永元年～嘉吉元年（一三九四～一四四一）。室町幕府の六代将軍。明徳五年生れ。応永十年、青蓮院に入り義円と称す。義持の死によりクジ引きで将軍になる。三月に義宣と改名、翌年三月に元服。義教と改名、十四年間将軍として君臨。信濃の小笠原や駿河の今川などの守護を助け永享四年九月には富士遊覧と称して駿河に下向。永享十一年二月に持氏を自害させた（永享の乱）。嘉吉元年六月、猿楽見物に赤松邸に招かれた義教は、赤松満祐に殺された（嘉吉の乱）。四十八歳。○**東国**　東の地方の国。特に都からみて近畿以東、平安では、逢坂関（近江）以東を関東と称し、東山、東海両道の別称としていた。鎌倉では、広く北陸道も兼摂していた。○**進発**　大将と総大将とかが敵を討ちに戦場へ出向くこと。「Xinpat シンパッ」（日葡）。○**催さる**　準備する。○**今川駿河守範政**　貞治三年・正平十九年～永享五年（一三六四～一四三三）。室町前期の武将。民部大輔・上総介。父は泰範。応永二十一年、駿河の守護となる。同二十三年の上杉禅秀の乱では幕命を受けて鎌倉公方足利持氏を助け、鎌倉に攻め入り、乱を平定した。しかしその後、幕府と鎌倉公方との対立が激化し、幕府の意を受けて関東の監視役を勤め、永享四年、将軍足利義教の富士遊覧を駿河に迎え、足利持氏の動きを牽制した。永享五年没した。七十歳。○**斯波**　斯波氏　三管領の一。「管領　クワンレイ」（饅頭屋本）　足利氏の支族。足利泰氏の長男家氏を祖とする。斯波の家名は家氏の陸奥国斯波（支和・斯波）郡領有

に由来するが、その曾孫高経までは足利氏（尾張流）を称した。高経の子義将以来嫡流は室町幕府の管領家となる。斯波義淳　？～永享五年（？～一四三三）室町時代の武将。室町幕府の管領。斯波義重（義教）の子。応永十六年、幼少で管領に就任。翌年六年に解任。永享元年再び管領に就任。同四年に辞任。同五年没す。○**細川**　細川氏。三管領の一。足利義季が三河国額田郡細川郷に移り細川を名字とした。京兆家、阿波守護家、備前守護家などの庶流数家が同族連合を形成した。細川持之　応永七年～嘉吉二年（一四〇〇～一四四二）。室町中期の武将。幕府管領。父は細川満元。永享四年管領となる。有力守護と合議して将軍を諫めたが、阻止できなかった。嘉吉二年、病のため管領を辞し四十三歳で没す。○**畠山**　畠山氏。重能が武蔵国畠山荘の開発領主となり畠山庄司を称したことから畠山となる。足利一門の豪族としては、義純より始まる。三管領の一で、基国は初代。畠山満家応安五・文中元年～永享五年（一三七二～一四三三）。南北朝末・室町時代の武将。父は基国。応永十七年から十九年まで、および同二十八年から永享元年までの間、管領となる。将軍後継問題では満済と図り義円を迎え、義教となす。永享五年に六十二歳で没する。○**化**　したがう。○**属す**　ショクス。「ぞくす」とも。従属する。○**大乱**　ここでの大乱は、上杉禅秀の乱のことか。応永二十三年（一四一六）十月より翌年正月まで、上杉氏憲（禅秀）が鎌倉公方足利持氏に反して起こした室町時代前期の内乱。氏憲は持氏の叔父、満隆を奉じて持氏邸を夜襲した。持氏は上杉憲基邸に逃れ、さらに小田原を経て駿河に逃げた。ところが将軍足利義持の弟義嗣が、氏憲と気脈を通じ、将軍の座をねらっていたことがわかり、幕府は義嗣を拘禁し、駿河守今川範政と越後守護上杉房方を関東に進撃させた。このため形勢は逆転し、持氏・憲基が鎌倉に攻め込み、翌年正月禅秀を破った。○**南方の強敵**　北畠満雅のことかと考えられる。北畠満雅　？～正長元年（？～一四二八）室町時代前期の武将。第四代伊勢国司。応永十九年、二十一年、正長元年と三度挙兵している。特に正長元年は皇位問題で小倉宮を迎えての挙兵となった。義教から発遣された伊勢守護土佐持頼と戦い敗死した。【余説】参照。○**好事もなきにはしかず**　好事の無きに如かず。たとえよいことであってもあればそれだけ煩わしいからむしろ何事もなく平穏なのがいちばん良い（故事・俗信　ことわざ大辞典）。「好事も無には如じ」（文明本）。○**比**　時。また、割合。または、嵩などの意。「Coro コロ」（日葡）○**御教書**　公方様の書状、あるいは許可状。「Miguioxo ミギョウショ」（日葡）。○**御慰**　振り仮名は原文のまま。「なぐ」は「なぐさみ」の誤刻か。○**末座**　座敷の最も下の座、最も後方の座。「Batza バッザ」（日葡）。○**一間所**　一柱間を仕切った室。転じて一室。ひとま。「ヒトマドコロ」（書言字考）。○**数をつくして**　残らずある限り（故事・俗信　ことわざ大辞典）。○**高亭**　高いあずまや。○**みずはいかに思ひしるべき…**　（歌意…見ないでどのように理解することができましょうか、言葉も及ばないほど富士は素晴らしいと前もって聞いていたのですが。）類歌「みずはいかに思しるべき言のはも及ばぬ富士とかねて聞きしも」（『富士御覧日記』）。○**君がみむ今日のためにや…**　（歌意…あなたが御覧になる今日のために富士の白雪は昔からつもっていたのです。）類歌「君がみむけふのためにや昔よりつもりはそめし不二の白雪」（『富士御覧日記』）。○**三間**　一間は約一・八二メートル。三間は約五・四六メートル。○**五尺**　一尺は約三〇・三センチメートル。五尺は約一五一・五センチメートル。○**隋の煬帝**　隋は中国の王朝（五八一～六一九）。煬帝（五六九～六一八）。二代目の皇帝。姓は楊氏。六〇四年、父を殺し帝位につく。大土木工事を行うなどし、後世に多大な利便を与えたが、豪華を好んだため、各地で農民による蜂起があり、宇文化及に殺された。○**西国**　園の名前。上林苑の異名。上林苑とは、中国、長安の西方にあった漢の庭苑。秦の始皇帝が創設、漢の武帝が拡張、修理。周回約三百里、天下の珍禽・百卉奇草を集め、天子は秋冬ここで射猟を行った。○**龍頭鷁首**　平安時代、園遊などの折、貴人の御座船とし、または伶人などを乗せて楽を奏させる船。二隻を一対とし、一

隻の船首に龍の形、他の一隻に鷁の形の彫物をつけたりその形を描いたりしたもの。「龍頭鷁首　リヨウドウゲキシユ」（易林本）。「…共ニ船ノ異名ナリ也」（増補下学集）。「鷁首……其形を゛かく者は、船をして浪波に溺さらんことを欲して也」（『和漢船用集』）。○**玉楼**　「玉樓　ギヨクロウ」（易林本）。○**金殿**　「金殿　キンデン」（易林本）。○**かゝやく**　「Cacayaqu カカヤク」（日葡）。○**泛**　「泛　ウカフ」（倭玉篇）。○**桂の櫂蘭の**　「かいと云、さほと云、かちと云へき者櫂棹……等の字也」（『和漢船用集』）。桂・蘭共に美称の形式か。「桂櫂兮蘭枻」（楚辞）。○**摯**　サホの訓み未確認。摯一二六三一（大漢和）。本来の意はつかむ。○**操り**　「操　アヤトル」（伊京集）。○**日よみ**　日和見の意か。○**明州**　中国浙江省東北海岸の町、寧波の古名。唐代の明州府の首都であり、日本の遣唐使の上陸・上船の地でもあった。海上交通の要地として栄えた。○**八百里**　一里は約四キロメートル。約三千百二十キロメートル。「寧波府……道規日本ヨリ海上三百里」（『華夷通商考』）。「小倉大坂間一三六里」（『和漢三才図会』）。以上をふまえ、八百里は誇張。○**大風**　「Taifu Vocaje」（日葡）。○**破軍**　破軍星。北斗七星の第七番目の星の名。柄杓形の柄の先端に当る星で、古くからこの星の位置で時を知った。陰陽道で、金神の一としてその方を忌む。○**武曲**　北斗七星の六番目の星の名。武運をつかさどる星とされる。○**文曲**　北斗七星の四番目の星。○**北斗の星**　大熊座の七つの星。七星とも。北の空に斗の形に並ぶところからの命名。古来航海の指針として重んじられ、また、斗の柄の指す方向で時を知った。○**参商**　参星（オリオン座の三つ星）と商星（さそり座の三つ星）。○**時変**　ときのうつりかわり。時勢の変化。○**運気**　自然界の現象に現われるという人間の運勢。○**凝然**　思いを一事に集中すること。思いをこらすこと。○**伶人**　音楽を奏する人。楽人。○**楽器**　「楽器　ガクキ」（易林本）。○**六律**　十二律の音を陰陽に分けたときの、陽（律）に属する六つの音（中略）。日本では壱越・平調・下無・鳧鐘・鸞鏡・神仙の六つ。○**六呂**　十二律の音を陰陽に分けたときの、陰（呂）に属する六つの音。日本では断金・勝絶・双調・黄鐘・盤渉・上無の六つ。○**太平楽**　舞楽の曲名。唐楽、太食調。左舞。甲冑をつけ、太刀を帯びた四人の武人が舞う武の舞で、文の舞の万春楽とともに、祝賀の場などで行われる。（中略）破の舞の中の剣の舞は、漢の高祖と楚の項羽とが鴻門で会見したときの項荘・項伯を模したものといわれ、項荘鴻門曲とも称せられる。「武将太平楽……又謂項荘鴻門曲、常太平楽云、……服飾皆作タリ崑崙象、……」（『教訓抄』）。○**装束**　ヨソホヒの訓み、未確認。「装　ヨソホヒ」（諸節用集）。○**しほかしき**　「しほらしき」の誤刻。○**から子の人形**　中国風の衣装や髪形をしている子どもの人形。唐子人形。○**還城楽**　舞楽の曲名。乞食調。「還城楽……此曲者西国之人好テ蛇ヲ食トス其蛇ヲ求メ得テ悦フ姿不可説ナル間模其躰作此舞フ……」（『教訓抄』）。○**ばとう**　抜頭。唐楽。小曲。太食調（中略）。恐ろしい面をつけ、撥を持って舞う。「抜頭……唐ノ后物ネタミヲシ給テ鬼トナレリケルヲ、以宣旨楼ニ籠ラレタリケルカ、破出給テ舞給姿ヲ模トシテ作此舞……八人出舞〻之……桴ノ採リ本末ヲ返ツ、大輪一返、是ニ桴ヲ右ノ面ニ懸テ、左右伏テ面懸如杖替事、如胡飲酒破、其後諸肘ヲ打チ、尻ヘ走テモトリテ打テ居テ返サシテス……」（『教訓抄』）。○**ばちがへり**　抜頭を舞う際に撥を持って舞うことを指す。○**やうらく**　装身具の一つで、珠玉や貴金属・珊瑚などを糸に通して首や胸にかけた。○**火うち**　火打石。○**鉄炮**　「鉄炮　テツハウ」（諸節用集）。○**どうぐすり**　火縄銃などの胴にこめる火薬。たまぐすり。弾薬。○**数多**　「数多　アマタ」（諸節用集）。○**亡さりて**　「亡　ウス」（倭玉篇）。○**いかさま**　きっと。○**兵乱**　「兵乱　ヒヤウラン」（諸節用集）。○**人民**　「人民　ニンミン」（易林本）。○**前表**　事の起こる前ぶれ。前兆。ここでは、永享四年以降に連続して起こった大和の土一揆や延暦寺衆徒の強訴などの混乱を指す。

【出典】『拾遺録』「淋池」（一部）『富士御覧日記』〈富士2〉。『似我蜂物語』二―一〈富士3〉。『太平広記』二三六「奢侈」一、『漢魏叢書』「拾遺記」巻六昭帝元始元年穿淋池の条（江本氏教示）、『御前於

伽』四―一〈川元ひとみ「都の錦『御前於伽』考」（「芸能文化史」第九号平成元・3）〉。なお柳牧也氏は「『似我蜂物語』小考」（私家稿）の中で冨士氏が典拠として指摘する『拾遺録』「淋池」に疑問を持っており、『太平広記』二三六「伎功」二の「水飾図経」を挙げている。

【余説】 南方の強敵に関して、大西源一「後南朝と北畠氏」（『後南朝史論集』原書房 昭和56・7）も参考にした。

煬帝に関する記述と関連する部分が、『十八史略』〔煬皇帝〕（明治書院 昭和44）の中に見受けられる。本話中の「煬帝の数千の大舶を作り」「かの西園」「名木奇花」に対し、『十八史略』では「龍舟及び雑船数萬艘を造らしめ」「長安の西園」「嘉木異草」と類似した表現が見られる。なお煬帝については、宮崎市定氏『隋の煬帝』（中央公論新社 昭和62）に詳しい。

本話中には二首の和歌が見られるのだが、それらは作者の創作ではなく、先行する和歌の利用である。和歌の初出は勅撰集等であるが、実際には中・近世に刊行された『和歌題林愚抄』『明題和歌全集』等の類題和歌集から選出し、物語の展開に即して歌の一部を改変するという方法を用いている〈冨士2〉。土屋順子「『狗張子』の和歌」（『大妻女子大学大学院文学研究科論集』9、平成11・3）。

○蜘蛛塚

むかし諸国行脚の山伏＊覚円といふ者あり。紀州＊熊野に参籠し、それより都にのぼり、先＊清水寺に詣んとす。＊五条烏丸わたりにて日漸暮たり。こゝに＊大善院とて大きなる寺院あり。覚円幸なりと寺僧に請ふて一夜をあかさんとす。寺僧すなわち相許して、堂のかたはらなるいかにもきたなき小屋を借しけり。覚円大きにいかりて、一夜ばかりのかりの宿、＊僧徒の身として此＊修行者に、かゝる＊不徳心は何事ぞやといふ。寺僧打わらひて、これまつたく修行者をあなどるにはあらず。実は此本堂には、年久しく＊妖ありて住めり、凡そ三十年の内三十人、その死骸さへ見えず。このゆへに本堂をは借さずといふ。

覚円聞て、何条左様の事あらん、史＊妖は人によりて起るといへり。豈此＊知行兼備の行者を犯す事あらんやと、寺僧も再三諫むといへとも、あへて用ひざれば、やむことを得ずして本堂の戸をひらき＊あらましに掃除して誘なへば、覚円しづかに仏を礼し念誦して、心を澄し座し居たり。しかれども彼寺僧の詞のすへおぼつかなく思ひ、腰の刀を半ばぬき出し柄を手に持ながらねぶりゐるところに、夜すでに＊二更に及ぶ比、ぞつと寒くなり堂内しきりに震動して、風雨山をくづすがごとし。その間に天井より大きなる毛おひたる手をさし出し、覚円が額をなづ。すなはち持たる刀をふりあげ、＊てうどきる。物にきりあてたる声ありて、仏壇の左のかたにをつ。夜まさに＊四更にいたる比、又さきの手をさしのぶ。此度もすかさず刀をふりあげてはたときる。

やうやく夜あけて、寺僧心もとなく思ひたづね来る。覚円前夜の様子をかたるに、寺僧奇異の思ひをなし急ぎ仏壇のかたはらをみるに、大きなる蜘蛛死してあり。ながさ＊二尺八寸ばかり、珠眼円大にして爪に銀色あり。寺僧ます〳〵驚き、堂の傍にこれをほりうづめ塚をつきぬ。かつまた此山伏の＊行徳いちじるき事を感じてしばらく此所にとゞめ、壱通の＊祭文を書しめかの塚をまつり、ふたゝび妖怪なからん事を祝す。猶今にいたるまで、その塚ありて＊蜘蛛塚といふとかや。

○**覚円** 『日本仏教人名辞典』によると、平安中・後期の天台宗の僧と鎌倉後期・南北頂時代の日蓮宗の僧がいるが、本話のモデルは未詳とすべきか。○**熊野に参籠し** 熊野三山に参籠し。「熊野三山」とは、熊野坐神社（和歌山県東牟婁郡本宮町鎮座）・熊野速玉神社（新宮市鎮座）・熊野那智大社（東牟婁郡那智勝浦町那智山鎮座）の三山を一

体の社として呼んだ名称。「Samro サンロゥ　ある寺（Tera）、あるいは社へ行って、そこに閉じこもること、あるいは引き籠もること」（日葡）。○**清水寺**　現東山区清水一丁目。山号は音羽山。清水寺ともよび、北法相宗本山。本尊は平安時代の木造十一面観音立像（重要文化財）。西国三十三所観音霊場の一六番札所。また洛陽三十三ヵ所観音の一二番札所で、同じく一〇番地蔵院・一一番奥院・一三番朝倉堂が境内にある。○**五条烏丸わたり**　五条烏丸町（下京区烏丸通松原下ル）。南北に通る烏丸通（旧烏丸小路）を挟む両側町。○**大善院**　『雍州府志』などでは、「五条ノ北烏丸」にあったとする。なお、『京町鑑』では「大政所町……東がは大善院と云本山派の山伏の住居門がまへの家有。今は宗外と成たるよし此寺に蜘塚とて有。むかし此所に土蜘住て天怪有しゆへ退治して地に埋しとぞ」と伝えている。『大日本寺院総覧』では、熊野郡海部村、下京区高倉通仏光寺下ル新開町にあった二院が確認できる。【余説】参照。○**僧徒**　「僧徒　ソウト」（易林本）。○**修行者**　諸国の霊場を遊歴する行脚僧や山伏をさしていう場合が多い。「Xuguioja シュギャウジャ　遍歴者、すなわち聖地を巡拝して回る人」（日葡）。○**不徳心**　心がいきとどかず、不親切なこと。○**妖**　本文中振り仮名「はけもの」。「天化バケモノ　又妖バケモノ」（広本節用）。「Baqemono バケモノ　他の物に姿を変えたり、似せたりした物。たとえば、蛇や狐などの姿になって現われる悪魔など」（日葡）。○**妖**　本文中振り仮名「よう」。「妖不レ勝レ徳」（伊京集）、「妖　よう」（落葉集）。○**知行兼備の行者**　仏教的な知識と修行の行を兼ね備えている行者。○**あらましに掃除して**　おおざっぱに掃除して。○**二更**　およそ午後九時から十一時までの時刻。戌の刻。○**てうどきる**　いきおいよくばさっと切る。○**四更**　およそ午前一時から三時までの時刻。丑の刻。○**二尺八寸**　約八五センチメートル。一尺は三〇・三センチメートル、一寸は三・〇三センチメートル。○**行徳いちじるき事**　「行徳」は、修行による徳。また、身の中にある功徳、修行をつんで得た法力。「Ichixirui イチシルイ　周知の、明白な（ことに）Ichixiru イチシルゥ　明らかで、明白に」（日葡）。○**祭文**　亡者を弔祭するために読む文。○**妖怪**　「妖怪　ヨウクワイ　モツケノ事也」（運歩色葉集）。「妖怪　ようくわい　化生物也」（和漢通用集）。「Yoquai ヨゥクヮイ　Vazauai ayaxij（妖ひ怪しい）わざわいと危険なこと」（日葡）。○**蜘蛛塚**　【余説】参照。

【出典】『太平記』二十三「大森彦七事」、（一部）『曽呂利物語』巻二―四「足高蜘の変化の事」〈富士2〉。『博異志』「木師古」〈江本〉。

【余説】　大善院にまつわる蜘蛛塚の由来は、後に刊行された『雍州府志』「蜘蛛塚　五条ノ北烏丸大善院ノ中ニ在リ。古へ斯ノ処大ナル蜘蛛妖怪ヲ為ス。遂ニ之ヲ殺メ土中ニ埋ム。是ヲ蜘蛛塚ト号ス」（貞享三年刊・巻十）などをはじめ、『京羽二重織留』（元禄二年刊・巻五）、『名所都鳥』（元禄三年刊・巻六）などの地誌にも見られる。

○飯森が＊陰徳の報

＊豊臣秀頼公の＊侍大将＊鈴木田隼人佐は、中西国の敵を押ゆる＊番船の＊下知を仰付られ、＊穢多が城に居住せらる。其家臣＊飯森平助といふ人、＊盗賊奉行として＊一心なく、鈴木田に忠功をはげます。天性心すなほにして慈悲ふかく、其＊意、貧して弱きをあはれみ、富て憍れるを制す。故に人自然と其裁断に服して、欺くにしのびす。

或時ひとり＊政所に臨で訴訟の事を判断す。一人の＊囚人あり、その名を＊土井孫四郎といふ。＊罪状まぎれなきによりて、＊面縛［しばる］して＊誅伐せんとす。孫四郎ひそかに兵助にむかひて、我はもと不義をなせるものにあらず、名ある武士なり、知謀勇力よのつねならず。あはれ君よく我咎を察して、命をたすけ再び故郷に帰し給へかし。しからばかならず君がために力を尽して、その厚恩を報ぜんといふ。兵助つら〳〵かれが＊面顔魂をみるに＊凡人にあらず、＊

詞色＊雄長にして臆せず、まことに豪傑の士なり。兵助心にこれをたすけんとおもひ、わざと＊伴りて聞ぬ躰して許さず。その夜更すぎ人しづまりて、ひそかに＊獄屋の役人をよびて、かの囚人をゆるし帰さしめすなはちその役人も＊亡失させて屋敷を出しぬ。

翌日獄中囚人一人にげいでゝ、又もにげうせぬと披露す。鈴木田大におどろき、これしかしながら兵助が＊越度なり。とて、しばらく出仕をやめて＊閉居せしむ。その比＊徳川家衆、摂州大坂に＊在陣し給ひ、＊蜂須賀阿波守に仰付られ穢多が城を攻させらる。城中勝利を失ひて敗北す。兵助も馬にのり士卒を下知して、命を惜まずふせぎ戦ふといへども、大軍無勢にしてかなはず。つゐに城を攻落され、鈴木田やう〳〵一方を切抜＊万死をいでゝ一生を＊全し、＊秀頼公の館に帰参しぬ。それより兵助、＊旅客牢浪の身となり、あなたこなた漂泊せしが、後には糧尽、嚢空して、困窮実にはなはだし。＊辛吟とさまよひて＊播州の地に至る。或大なる在郷にゆきかゝり、その＊郷の＊代官職の人の姓名をきけば、土井孫四郎といふ。

我むかし＊放しやりたる囚人の姓名と同じ。兵助ふしぎにおもひて、その屋敷をたづねて案内乞。孫四郎大きにおどろき、急にはしりて迎ふ。よくみればうたがふべくもなきむかし放しやりたる囚人なり。むかしの事共語り出つゝ、まことに命の親なりひごろなつかしくおもひしに、よくこそ尋来給へとて＊拝謝＊奔走し、すなはち＊別に＊座敷をきよめてすへ置、昼夜酒宴を催し、相ともに寝臥して歓をきはむ。凡そ十日あまりに及ぶといへども、つゐに我＊居宅にかへらす。ある夜孫四郎その居宅にかへれり。兵助折ふし厠に行けり。此厠と孫四郎居宅と、たゞ壁ひとへをてぬ。しづかに事の様をきけば孫四郎妻の声として、君此間ことのほかにもてなし給ふ客は誰人ぞや。此十日あまり、昼夜つきそひてかへり給はず、いぶかしといふ。孫四郎こたへて、むかしあの客の大恩をうけて、危き命を助かり、今かゝる＊栄花をきはむるも、これひとへにあの客の陰徳によれり。何をもつて此大恩を報ぜん様をしらずといふ。妻のいふ、君はおろかなる事をのたまふものかな。それ人の一生盛衰浮沈古今めづらしからず。時を得ては人を制し、運＊窮りては身を屈す、なんぞ過去しむかしの事をかへりみん。諺にも＊大恩は報ぜずといへり、かつ君むかし難にあひ、囚れにかゝり給へる事、誰知ものなし。しかるに今かゝるふるまひし給ひ、もし他人にもれきこえなば、かさねての恥辱なるべし。はやく時機にしたがひて、いかにも思慮し給へといふ。孫四郎返答もせざりしが、やゝ久しくありて、げにもなんぢがいふところ尤なり。我智謀をもつて＊よきにはからはん、かならず＊色を悟らるゝ事なかれといひて止ぬ。兵助聞すまして、大きにおそれおのゝき、衣服荷物悉くすて置、直にその家をはしり出て、馬をかり鞭をはやめて逃去、その夜の＊初更の比までに、＊十里あまりを過て摂州堺に到る。ある＊旅店に宿をかりぬ。その躰はなはだあはたゝし。兵助が＊僕これ何故ともしらずあやしみ問ふ。兵助しばらく＊座を定めをさすりて、＊具に孫四郎がたちまち大恩を忘て、かへりて＊野心をさしはさむ次第を語り、ためいきをつゐて憤激す。僕これを聞て涙をながし、その陰徳を感するあいだ、忽ちの床の下より、痩枯たる男一人、刀を抜持て出あらはる。兵助膽を消して驚く。この男のいはく、我は＊軍中忍びの達者にて、しかも仁義の侍なり、さきの孫四郎我をのみて君が頭をとらしむ。しかれどもふしぎに今の物がたりを聞て、此孫四郎が＊放逸無斬なる事を知り、君はまことに＊智仁兼備の君子なり。あやういかなあやまつて殺さんとす、我義におゐて君を捨じ。君しばらく寝入事なかれ、すこしのあいだに君がために、かの孫四郎が頭をとりてかへり、君が＊鬱憤を散ぜしめんといふ。兵助＊恐懼して、よきにはからひ給れ。といふ。此男刀を手に提げ、門を出るとみえし。＊屋をつたひ高塀を越えて、そのはやき事飛がごとし。既に夜半にいたり立かへりて、敵の首を打おほせぬとよばはる。火をとぼしてよくみれば、すなはち孫四郎が首なり。その男すぐに暇乞て帰り去る。その跡たちまちみえず。それより兵助は諸国＊斗藪して、後には都にのぼりて兵術の師範となりて、その身を終りしといふ。

○**陰徳**　人に知れないように施す恩徳。○**豊臣秀頼**　安土桃山時代の武将。秀吉と側室淀君の子。六歳で家を継ぎ徳川秀忠の娘千姫を娶る。大坂夏の陣で、落城して母淀君と共に自刃。○**侍大将**　侍の身分で一軍を指揮するもの。室町末期には、侍一組を率いたもの。○**鈴木田隼人佐**　蒲田隼人兼相のこと。剣客。秀頼に仕え、三千石を領した。初名は岩見重太郎。大阪夏の陣で水野勝重の軍と戦い死亡。○**番船**　港口、関所などで必要に応じて警護、見張りを行う船。○**下知**　指図をすること。命令。○**穢多が城**　未詳。○**飯森兵助**　未詳。○**盗賊奉行**　上位者の命により公事や行事を代行することを奉行といいその担当者もまた奉行・奉行人と称す。盗賊奉行は盗賊を取り締まる係の奉行。責任者。○**二心**　裏切りの心。「二心　フタコヽロ」（易林本）。○**意**「意　ココロ」（諸節用集）。○**政所**　鎌倉・室町時代より民事訴訟もつかさどった役所。○**囚人**　捕えられて獄につながれている人。○**土井孫四郎**　未詳。○**罪状**　犯罪の具体的事実。○**面縛**　「Menbacu メンバク　文章語。縄で縛って顔を覆い隠すこと」（日葡）。○**誅伐**　罪ある者を攻め討つこと。○**面顔魂**　「Tcuradamaxij ツラダマシイ　怒りとか厳しさとかなどの内面的な感情を身振りや顔つきで表す人」（日葡）。○**凡人**　「ボンニン」（饅頭屋本・易林本）。○**詞色**　言葉つき。言葉の使い方の意か。○**雄長**　威厳に満ちているさま。○**佯り**　①いつわる。あざむく。②うわべを装う（大漢和）。「佯狂　イツハリタフル」（合類）。○**獄屋**　牢屋。「獄　ヒトヤ」（易林本）。○**亡失**　逃げうせていなくなること。「亡　ニグル」（天正本・易林本）。○**越度**　あやまち。手おち。失敗。「越度　ヲチド」（黒本本・饅頭屋本）。○**閉居**　家の中にこもっていること。「塩冶判官閉居によって扇が谷の上屋敷、大竹にて門戸を閉じ」（『仮名手本忠臣蔵』四）。○**徳川家衆**　徳川家の家臣たち。○**在陣**　いわゆる大阪夏の陣。豊臣家滅亡。元和元年。○**蜂須賀阿波守**　蜂須賀至鎮。阿波国徳島藩主。蜂須賀家政の子。八歳より豊臣秀吉に仕える。関ヶ原役には東軍に味方した。同年家督相続。大坂夏の陣では和泉に布陣した。○**万死を出でて**　万死を出でて一生に逢う。ほとんど助からないと思われた危険な状態を脱してかろうじて命が助かること。○**全**　「全　マツタシ」（諸節用集）。○**秀頼公の館**　大坂城を指す。○**旅客**　「Reocacu リョカク」（日葡）。○**辛吟とさまよひて**　苦しみさまようこと。○**播州**　播磨国の別称。今の兵庫県の南西部。○**郷**　むら。さと。いなか。場所。○**代官職**　中世、荘官の下で荘園の管理などその職務を現実に代行した預所代・下司代も大寒と呼ばれ、所職が成立し代官職となった。○**放し**　「放ユルス」（天正本・易林本）。○**拝謝**　謹んで礼を言うこと。○**奔走**　もてなすこと。○**別**　「別儀　ベチギ」（黒本本）。○**座敷**　別棟に座敷をしつらえた。○**居宅**　住んでいる家。○**栄花**　世に時めき栄えること。「栄華　エイグワ」（易林本）。○**窮り**　極限に達させる。果てまで物事をおしつめる。○**大恩は報ぜず**　小さな恩義は負い目に感ずるが、大きすぎる恩は気づかずにかえって平気である。「然る時は御家の滅亡と申もの。諺にも大恩は報ぜずといへり。所詮かの浪人は御家のあた。ひそかに招かれ打殺して。昔の悪名の顕はれぬ御思慮あれ」（『愛護初冠女筆記』四）。○**よきにはからう**　適切に処置する。○**色**　顔色。○**初更**　五更の一。今のおよそ午後七時から九時。戌の刻に当る。○**十里**　約三九キロメートル。一里は約四キロメートル。○**旅店**　「旅店　リヨテン」（書言字考）。○**僕**　人につかわれる男。しもべ。下男。○**座を定め胸をさすりて**　落ち着くさま。○**具**　「具ツブサ」（諸節用集）。○**野心**　大坂役当時の播州の東半分は姫路城は徳川家康の女婿池田輝政、明石城は正輝の甥の池田出羽守由之に治められていた。土井は徳川方の大名に飯森兵助を差し出すつもりであったと考えられる。○**軍中**　軍隊または軍営の中。○**放逸無斬**　既出。巻四―四参照。わがままで恥知らずなこと。「斬」は本来ならば慙の字。○**智仁**　賢くいつくしみ深いこと。○**鬱憤**　心に積る怒り。抑えに抑えたうらみ。○**恐懼**　恐れかしこまること。○**屋**　屋根のこと。○**斗藪**　既出。巻一―六。僧が行く先々で食を乞い露宿などして仏道を修行すること。ここでは諸国を放浪し修行したの意味。

【出典】『醒世恒言』及び『古今奇観』「李汗公窮邱遇侠客」〈麻生〉。『原化記』「義侠」〈冨士2〉。

○五条の天神

京師五条西洞院の西に、＊五条の天神ましませり。これ大己貴の命をまつれるなり。むかし命少彦名命と天下の政務を謀り給ひ、かつ人民＊疫癘＊疾苦のために、その療養の方をさだむ。その天下後世に＊仁恵ある事、＊神農＊黄帝の＊下にあらずとかや、＊故に代々の＊執権奉行職の人、殊に＊尊信し給ふといふ。＊応永年中、此わたりに＊寿玄斉とて＊医師ありけり。わかきより＊学窓に＊眼をつくし黄帝＊岐伯の＊玄旨を探り、＊秦越人の＊深意をたづぬといへども、いまだその＊堂奥に達せず。かつ身の不遇なる事を歎きぬ。すなはちこの天神にいのりて、＊信仰のこゝろをこたらず。＊歳時にはかならず祭りて敬ふ事、年すでに久しくなりぬ。ある夜夢見らく、朝とく宿を出て天神の社にまうで＊恭敬の頭をかたぶくる所に、＊辱く天神＊社壇の戸びらををしひらき、まのあたり寿玄斉に告てのたまはく、なんぢわれをいのり其誠をつくす、何んぞ＊感応なからんや。なんぢ今身の不遇にして、困窮をなげく。しかれとも、これすなはち＊却てなんぢを福する所なり。それ日本は＊神国也。天子はすなはち＊天照大神の＊継躰にして、その統道をあらためず。かるがゆへに＊神道を＊尊崇し、王法を興隆し、＊仁政を施し朝憲を正ふすべし。＊畴昔王法神道に合する世には、世すなほに民＊淳して、国家＊安寧なり。風雨時にしたがひて＊飢饉＊餓死の＊愁なし。況や謀反＊弑逆のわざはひをや。後世にいたりて＊元暦に＊安徳天皇、＊承久に後鳥羽院＊元弘に＊後醍醐天皇、これみな＊君徳あきらかならず。＊叡慮はなはだ短して、天下を＊戎敵のために奪はれ＊宸襟つゐに安からず。或は変衰の花空しく壇浦の風にまよひ、悲泣の月いたづらに台嶺の雲に隠る。いかんぞ、王威＊十善の徳をまつて此極に至るや。これ神道の本をわすれて、＊政道人望にそむけば也。こゝにおゐて、王法はじめて衰へて、神道も亦廃しぬ。又かなしからずや。しかつしより、このかた今の世にいたりて、人道ます〳〵みだれ、子として父を＊弑し臣として君をうかゞふ。上道のはかるなく、下忠義のこゝろをうしなふ。＊人君国守としては＊仁義に暗く慈悲の心なく、＊賦斂重く、＊課役しげふして、国民を貧とり、家人を剥尽して、畢竟我身の楽とす。＊収斂無道の富に夸り、＊乱階＊不次の賞をたのむ。能もなく、智略もあさく、＊行跡非礼不義にして、＊善悪邪正をえらばず。＊阿諂者を＊賞、翫し忠孝なる者をかへつて罪科に行ふ。たま〳〵武芸学問に志有人も、利禄名聞のためにして、忠良のこゝろざし露ばかりもなし。凡武芸学問はみな＊聖経賢伝の旨を＊あきらめて、我忠功を達するのみ。何ぞ名利を事とせんや。＊あまつさへ、切磋琢磨の功をおへずして、新法小利にはしり、＊先賢の古術をすてゝ、もつはら＊奇兵＊詭譎を先とし、また、＊正兵の極致ある事をしらず。又、＊終日聖賢の書をよむといへども、行跡かへつて直ならず。仁義のこゝろなく、学問をもつて利慾にかへ、君に諂ひ、友を妬み、素より誠なれば、利を見て、義を忘れ、大慾無道にして、一生遊興に長じ、富貴栄花をうらやみ、衣類美麗を好む。かくのごとく君下を貪りとりて、その身の＊栄耀をきはめ、臣又上に＊佞媚して、一家の＊奢侈をつくす。凡その費る所の財宝＊資用天よりも降らす、地よりもいです。これみな人民の＊膏澤をしぼりとり収斂したる所なれば、ゆく〳〵天下ふたゝびみだれて、人民益窮し、＊四夷・八蛮たがひに国をあらそひ、大なるは小を并呑し、強きは弱きをしのぎ、盗窃争闘＊区にして、又そのあいだに飢饉疫癘流行、天下手足を措に、処なからんとす。なんぢ今かゝる時節に生れたり。なんぢしゐて身の不遇を歎きて、一旦の利禄を＊僥倖すといふとも、久しく＊保つ事あたはずして、却て災あらんとす。しかじ、貧に安じ跡を＊蔵んには、かつなんぢに一つの＊霊方を教ん。水上の浮＊

萍よく疫癘を癒す効能あり。多くもとめ貯て其時を待べしと。今の世のありさま将来の＊事変＊鑑にかけてのたまふとおもへば、夢はさめて夜はほの〴〵とあけにける。寿玄斉感心＊膽に銘じ、＊盥嗽＊盛服して、急ぎ天神に詣すれば、夢の面影あり〳〵と社壇の戸びらすこしひらけ＊異香四方に＊薫郁たり。それより寿玄斉世のなり行ありさまをみるに、夢中の告にたがはす。＊永享の年に及て＊京都鎌倉確執の事おこり、鎌倉持氏朝臣京都将軍に恨る事ありて、謀反す。京都度々大軍を起し、＊討手にさし向らる。持氏父子敗績して、自害す。これより、諸方戦争をこりて、しづかならず。国家衰廃天運＊否塞して、大に疫癘流行て、人民おほく死亡せり。寿玄斉かの天神の告を思て試に浮萍を調和してあたふるに、大かたいへずといふことなし。人みなその神効に服して、これ正に医王＊善逝の＊変作なりとて、おそれつゝしむ事よのつねならず。其後、＊今川上総介か父の疫病を＊愈しければ、＊上総介＊なゝめならずよろこび、棒禄＊過分に与えて招き、つゐにわが国に伴なひ下りて、身終るまて尊敬しけると也。

○**五条の天神**　五条天神社か。五条天神社は平安京左京五条西、西洞院南（現在の京都市下京区西洞院松原）にある神社。現在の祭神は少彦名命・大己貴命・天照大神。平安遷都に際して、空海が建立したと伝える。また、当社に参詣途次の牛若丸を弁慶が襲ったので有名。『宇治拾遺物語』に当社のことが見え、正治二年四月には正五位下を授けられ、のち、祇園社領となる。疫神と考えられたのは、東隣にあった五条道祖神との混同によるものか。○**疫癘**　悪性の流行病。「疫癘エキレイ」（易林本）。○**疾苦**　悩み苦しむこと。病気や生活の苦しみ。○**仁恵**　人に対して思いやりがあって情け深いこと。あわれみ。恵みの心。○**神農**　人名。中国古代の伝説上の皇帝。姜姓で人身牛首。農具を発明して人々に耕作を教えたので神農と称する。市を開いて交易をしていたので商業の神ともされ、またいろいろの草をなめて、薬草を見分け、その薬草をもって人々の疫病を救ったので医薬の祖とされ、医師・薬屋では、その絵像を祭った。○**黄帝**　中国古代の伝説上の帝王の名。五帝の一。暦・舟車・家屋・音楽・文字・医薬などを民に教えた。○**下**　「かみ」の対。位置的に低いもの、価値的に劣るものを表す。身分の低い者。また、為政者に対する人民。○**故に**　そのために。だから。「故　カルカユヘニ」（名義抄）。○**執権奉行職**　ここでは、政治を司る職務をいう。○**尊信**　尊んで信頼すること。また、尊んで信仰すること。「尊信」の用例未確認。○**応永年中**　一三九四～一四二八。○**寿玄斉**　未詳。寿玄という僧は『拾遺集』（巻九・雑下）に入集歌が見られる。○**医師**　「医師　クスシ」（饅頭屋本）。○**学窓**　学問を修める処。学びのまど。学校。○**眼をつくし**　「眼をさらす」に同じ。目を見開いて見ることより、物事を落ちなく広く多く見る。転じて、書物などを熱心に読み、勉強する。○**岐伯**　中国古代、黄帝の時の名医。○**玄旨**　奥深い内容。○**秦越人**　シンエツジン。周の名医。扁鵲のこと。○**深意**　シンイ。ふかい心。ふかい意味。「ジンイ」の訓み未確認。○**堂奥**　堂奥は、家屋の入り口に近いところと、それを通って入るべき奥向きの部屋とを合わせていう。転じて、宗教・学問・技芸などに関して、段階を踏んで到達した精髄をいう。○**信仰**　神仏や高僧に深く帰依すること。「信仰　シンガウ」（前田本字類抄）。○**歳時**　毎歳の時節時節。○**恭敬**　つつしみ敬うこと。○**辱く**　自分のあり方に比べて相手のあり方が優れていることを認めて、恥じ入り、恐懼してかたくなるような状態を表す。ありがたくも、畏れ多くも、の意。「辱　カタシケナシ」（易林本）。○**社壇**　神を祭る壇場。神を祭ってある所。「社壇　シヤダン」（饅頭屋本）。○**感応**　信心の誠が神仏に通じて、加護・効験の実があがること。「感応　カンヲウ」（易林本）○**却て**　「却　カヘツテ」（易林本）○**神国**　神によって開闢した国。神霊の加護のある国。神の道によって立っている国。○**天照大神**　天照大神のこと。「てんせうだいじん」の訓み未確認。○**継躰**　天子の位を継承する。あとつぎ。「継体君　ケイタイノキミ」（書言字考）。○**神道**　民間信仰的な神に関するものを理論付け、儀式化した

もの。○**尊崇**　ソンソウ。尊び敬う。尊敬。○**仁政**　ジンセイ。王者が民をいつくしむまつりごと。○**畴昔**　「疇昔　ムカシ」（易林本）○**淳して**　用例未確認。○**安寧**　やすらかなこと。特に、世が治まって秩序正しく安らかなさまをいう。○**飢饉**　「飢饉　キキン」（下学集）。○**餓死**　「餓死　ガシ」（易林本）。○**愁**　「うれふ」の名詞形。不安・心配・不幸・不満。「愁　ウレフ」（妙義抄）。○**弑逆**　君主や父を殺害すること。用例未確認。○**元暦**　一一八四～一一八五。○**安徳天皇**　治承二年～文治元年（一一七八～一一八五）。在位六年。高倉天皇第一皇子。母は平清盛の娘建礼門院徳子。寿永二（一一八三）平氏に擁せられて西海に落ち、文治元年長門壇ノ浦で平氏一門と入水したことは『平家物語』に見える。実際は女性であったという説もあり、壇ノ浦に入水したのではないとして、その行方を語る遺跡が広く諸地方に散在している。○**承久**　一二一九～一二二二。○**後鳥羽院**　治承四年～延応元年（一一八〇～一二三九）。高倉天皇第四皇子。第八十二代天皇。建久九（一一九八）譲位、承久三（一二二一）討幕の事成らず出家。隠岐に流され、在島十九年にして崩御。○**元弘**　三三一～一三三四。○**後醍醐天皇**　正応元年～延元四年（一二八八～一三三九）。後宇多天皇の第二皇子。母は談天門院忠子。文保二年（一三一八）即位、初めは後宇多天皇の院政であったが、元亨元年（一三二一）より親政を行い、吉田定房・北畠親房らの人材を登用して、記録所を復活するなどの政治の革新に努めた。王政の復古を夢見て、倒幕を企て、正中の変、元弘の乱の両度にわたって失敗し、隠岐に配流されたが、護良親王・楠木正成の挙兵、足利尊氏・新田義貞らの帰属により幕府は滅亡し、建武の新政を行った。しかし、公武の不和のために、建武二年（一三三五）新政は破れ、翌三年、足利尊氏の強請により北朝の光明天皇に神器を授けたが、まもなく吉野に移って南朝を樹立。京都回復を夢見つつ、悲憤のうちに崩御。○**君徳**　君主の徳。又、君主たるの徳。○**叡慮**　天皇または上皇の考え。天皇の心。「叡慮　ヱイリョ」（明応五年本）○**戎敵**　戎狄。西戎と北狄。夷狄と同じく、辺境の人たちや外国人を卑しめていう語。「戎敵」の用例は未確認。○**宸襟**　天子の御心。「宸襟　シンキン」（易林本）○**台嶺**　比叡山の異称。○**十善**　十種の善。十悪を犯さないこと。前世で十善を収めたものは、現世に於いて天子に生まれるという。○**政道**　政治の道。政治のあり方。「政道　セイタウ」（易林本）。○**弑し**　用例未確認。○**人君**　国の君主。人の君たる主。「Iincun」（日葡）。○**仁義**　仁は博愛、義は道理にかなうことの意。五常の第一位に挙げられる、儒教思想の根本的な徳目。○**賦斂**　既出。巻五―一。税を割り当てて取り立てること。○**課役**　既出。巻五―一。人民を徴発して労役を課すること。「課役　クワヤク」（下学集）。○**畢竟**　ヒツキャウ。要するに。つまり。結局。○**収斂**　民から租税を取り立てること。特に、厳しい取り立てにいう。「収斂」の用例は未確認。○**夸**　用例未確認。○**乱階**　位階の順序によらず、越えて進め叙する。○**不次**　順序のよらぬこと。又、順序の乱れていること。○**行跡**　その人の行った行為。特筆するに足る行い。その人のやってきたこと。ことに、称賛敬仰の対象となる個々の行為についていうことが多い。「行跡　カウセキ」（饅頭屋本）。○**善悪**　仏語。道徳上、宗教上などから見た善と悪。よいことと悪いこと。また、善人と悪人。○**邪正**　道理や教え、考えや行いなどの、よこしまなことと正しいこと。「邪正　ジャシヤウ」（饅頭屋本）。○**阿諂**　用例未確認。○**賞翫**　用例未確認。○**罪科**　規則違反、またそれによる処罰をいう。「罪科　ザイクワ」（易林本）。○**聖経**　聖人の著した書。○**あきらめて**　明らかにする、究める、の意。○**あまつさへ**　そのうえ。おまけに。○**切磋琢磨**　玉などを切りみがくように、学問をみがき上げること。「切磋琢磨　セツサタクマ」（易林本）。○**先賢**　先の世の賢人。昔の賢人。○**奇兵**　キヘイ。異常の計略を用いて敵の不意に乗ずる兵。○**詭譎**　キケツ。あやしげなさま。奇怪なこと。○**正兵**　セイヘイ。正々堂々と正面から攻撃する兵。奇兵の対。○**終日**　「終日　ヒネムス」（天正本）。○**栄耀**　繁栄すること。はなやかに栄えて時めくこと。「栄耀　エイヨウ」（明応本）○**佞媚**　「佞媚　ネイビ

こびへつらう。又、其の者」（大漢和）。○**奢侈**　身分不相応なぜいたくな暮らしをすること。はでぜいたくなさま。ひどくおごること。「Xaxi シャシ　おごりおごる」（日葡）。○**資用**　入用のしなもの。又、かね。費用。○**膏澤**　カウタク。めぐみ。恩恵。○**四夷八蛮**　四夷は、中国において、自国を中華・中国と称するのに対し、四方の国を東夷・南蛮・西戎・北狄と称した。八蛮は、南方八種の夷国。○**まち〳〵**　「区　マチ〳〵」（饅頭屋本）。○**時節**　何かに遭遇しているときやころや時代を、時間の上だけでなく、その遭遇した世相や出来事をも含めていう。○**僥倖**　ゲウガウ。思いもかけぬ幸せ。もっけの幸。又、それを求めること。○**保つ**　振り仮名「だもつ」は、原文のまま。○**蔵ん**　「蔵　カクス」（易林本）。○**霊方**　霊妙な処方。すばらしい手当て。すばらしい方法。○**水上**　「水上　スイジヤウ」（書言字考）。○**萍**　水面に浮いている草の総称。上の用字で振り仮名「くさ」の用例未確認。○**事変**　事態の変化。天変地異など異常な出来事。○**鑑にかける**　鏡に映して見るように明らかである。きわめて確かだ。○**膽に銘じ**　深く心に刻み入れる。感銘の深いことをいう。また、深く心に刻み込んで忘れないようにする。「Qimoni meizuru（肝に銘ずる）」（日葡）。○**盥嗽**　クワンソウ。手あらい口そそぐ。○**盛服**　おごそかな正装。○**異香**　この世のものとは思われない、よい香り。「異香　イキヤウ」（易林本）○**薫郁**　用例未確認。○**永享**　振り仮名「えいかう」は「えいけう」となるべきところ。○**京都鎌倉確執の事**　永享の乱を指す。永享の乱は、永享十年（一四三八）八月から翌年の二月にかけて、鎌倉公方の足利持氏が、室町将軍の足利義政と関東管領の上杉憲実と抗争し、持氏が幕府の連合軍に攻められて鎌倉の永安寺で自滅した内乱。○**討手**　「うちて」の転。敵や罪人などを捕らえ、または殺すために差し向けられる者や軍勢。○**否塞**　ヒソク。とじふさがる。ふしあわせになる。○**善逝**　梵語 sugata（須伽陀）の意訳。好去の意で、真如実相の彼岸に行って、生死の煩悩に再び還ることがないという義。○**変作**　人々を救うために諸仏が姿を変えて現れること。○**今川上総介か父**　今川義元。既出。巻五―一。○**上総の介**　今川氏真。既出。巻五―一。戦国時代の武将。義元の長子、天文七年生る。永禄三年五月父陣歿の後を襲うて従五位下治部大輔に敍任、上総介と改め相伴衆に列したが、性暗愚にして衆望なく、家臣の背き去る者続出した。○**愈し**　用例未確認。○**なゝめならず**　並々ではない。ひととおりではない。○**過分**　物事の量が限度や標準を超えているさま。必要以上に多すぎるさま。「過分　クワブン」（黒本本）。

【類話】『太平記』三十五「北野通夜物語」、（一部）『京童』二〈富士2〉。

【余説】本文中の「天下手足を措くに処なからんとす」は『太平記』巻一「後醍醐天皇御時世ノ事付武家繁昌ノ事」に「万民手足ヲ措クニ所無シ」という文が見られる。そこでは「多くの人々がびくびくした生活を余儀なくされていた」の意で用いられている。

○鼠の妖怪

＊応仁年中、京師四条の辺に、＊徳田の某とて巨きなる商人あり。家富栄えて貨財倉庫に＊盈り其頃世大に乱れ戦争やむ時なく、ことに＊山名・細川両家権をあらそひ、野心を起し、度々戦ひに及びしかば、洛中これがために＊噪動し、人みなをそれまどひ、たゞ＊薄氷を蹈んで深渕にのぞむおもひをなす。徳田某もこれによりて都の住居物うくおもひ、＊北山＊上加茂のわたりに親属のありければ、ひそかに頼つかはし、すなはち加茂の在所の傍に、＊常盤の古御所のありけるを買もとめ山荘となして、しばらく此所に隠遁せんとす。しかれども久しく人も住ぬ古屋敷なれば、いたく荒はて軒かたぶき、＊牆くずれて、凡幾年経たる屋敷ともしれず。

徳田まづあらましに、掃除打して、＊徒移しぬ。京にある親属つたへ聞て、みな来りて＊賀儀をのぶ。主人よろこびて＊賓客を＊堂上

に請じて饗応し終日酒宴を催し、歌舞沈酔してあそび、夜に入けれは、賓主共に大に酔出て前後もしらず打臥しぬ。その夜、＊夜半ばかりに外より大勢人の来る音して、急に表の門をたゝく。主人あやしと門をひらきみれば、衣冠正しく鬚うるわしき人先立て入ていふやう。是は此屋敷の旧の主也。我一人の子あり。こよひはじめて＊新婦を迎へ侍り。その婚礼の儀式を執行はんとするに、わが今住所はせばくきたなし。たゞ今夜ばかり、此屋敷をかし給へ。夜あけなば早々立去りなんと、いまだいひもはてぬに、はや大勢入こみて、輿よ馬よとひしめき＊挑灯大小百あまり、＊二行につらね、まづさきへ飾り立たる輿打続て乗物かず〳〵かき入る。

その跡よりは供の女房いくら共なく笑ひのゝしりて来る。又年のほど六十有余の老人、大小の刀を帯て馬にのり、歩行の侍六七十人引連て、前後をかたく守護すと見ゆ。その間に結構に塗りみがきたる＊長持・＊挟箱・＊屏風・＊衣桁・＊貝桶のたぐひ、かずかぎりなく持つれ、貴賤男女凡二三百人、堂上堂下に並居て、大に酒宴を催し、珍膳＊奇羞山海のある所を尽し、かつまひかつうたふて、興に入るまゝに、主人や賓客を招き出し、かゝる目出度折から何かくるしかるべき。こゝへ出てあそび給へといへば、主人も賓客も酔に和し、興に乗じ座敷にいづ。

まづその新婦とおぼしきを見るに、年まだ十四五ばかりとみゆ。すこしほそらかに色しろく、またたぐひなき美人なり。次第に並居る女房たち、いづれも艶なるかほかたち、花のごとく出立て、みな一同に立さわぎ、新婦の手をとりたわふれて、こよひは＊いかで強ざらんと、大なる盃をすゝむれば、新婦いとたへがたきけしきにて、あなたこなたにげかくるゝを、おひとらへんとさわぐまに、風はげしくふきおちて、灯のこらず＊ふきけしぬ。

主人・賓客はつとおどろき、しばしして又火をとぼしみるに、人一人もなし。やう〳〵夜もあけてよく〳〵見れば、宵に＊こと〳〵敷持はこびたる道具とおもひしは一つもなく、却て主人の日比秘蔵しける茶の湯の道具より、椀・家具・雑器にいたるまで、みなこと〴〵くうち床にかけをきたるふるきかけ物、＊牡丹花下に猫のねぶれる所かきたる絵あり。名きえ印かすみて、誰人の筆ともしれず。これ一幅計ぞ、露ばかりも損ぜずありける。みな人、よからぬ＊怪異なりとて眉をひそむ。こゝに＊村井澄玄とて、博学＊洽聞の老儒あり。主人を訪らひ来て此旨を聞、しばし案じて、主人に向ひいふやう、これふかくおそるゝに足ず。老鼠［ふるねすみ］のいたす妖怪なり。それ猫は鼠のおそるゝ所なり。かるがゆへにその絵といへとも、あへて近つかざる事かくのごとし。かゝる例伝記に載るところすくなからず。是其気自然と相いれずして畏服す、所謂物其天を畏るといふもの也。その類一二を挙てこれをしめさん。われかつて或古記をみるに、むかし或里の中、一つの村に童子、大きなる＊蛙数十、＊汙池［いけ］＊叢棘［くさむら］の下にあつまるを見る。進んで是を捕んとす。熟視れば一つの巨蛇棘の下に蟠りて恣に羣蛙［かへる］を啖ふ。群る蛙凝りかたまりて、啖はるゝを待て、あへて動かず。

又、或村の＊叟＊蜈蚣［むかで］一つの蛇を逐ふとみる。行事はなはだ急かなり。蜈蚣漸く近けば、蛇また運かず。口を張て待つ。蜈蚣竟にその腹に入り、時を逾て出づ。蛇既に＊斃れぬ。村の叟其蛇を深山の中に棄つ。十日あまり過て往てこれをみれば、小き蜈蚣数知らず、その腐たる肉を食ふ。これ蜈蚣＊卵を蛇の腹の中に産けるなり。

又、むかし、一つの蜘蛛、蜈蚣を逐ふ事甚急なるをみる。蜈蚣逃れて＊籬槍竹の中に入る。蜘蛛復入らず。徒足をもつて竹の上に跨り、腹を揺かす事、あまた度して去る。蜈蚣を伺ふに久しく出ず。竹を割てみれば、蜈蚣已に節々爛断て、＊黶醤［かにひしお］のごとし。これ蜘蛛腹を動かす時、＊溺を＊灑て是を殺せるならん。物の其天を畏るゝ事、かくのことし。今鼠の猫の絵をおそるゝや、また同じ。豈久しく、その妖怪を恣にする事を得んやと。

かさねて主人に教へて其鼠の穴を狩らしむ。屋敷より一町ばかり東の方に、石のおほくかさなりて、小高き所あり。その下に大きなる穴あり。その中に年経たる鼠、かぎりなくむらがれり。みな捕へ殺してすぐに埋ぬ。其後は何の事もなかりけるとぞ。

○**応仁**　戦国時代。後土御門天皇朝の年号。一四六七～一四六九。○**徳田の某**　未詳。○**盈り**　「盈　ミテル」（文明本）。「盈るハ虧る　易月盈則食、釋名、月闕也、満則闕也、古歌　たれも見よみつれはやかて闕月のいさよふ空や人の世の中（誰も見よを一本におもへたゞにつくる）」、「みて　盈也充也崇也」（俚言集覧）。○**山名細川両家権をあらそひ**　応仁の乱を指す。応仁の乱は、足利将軍家および官領畠山・斯波両家の相続問題をきっかけとして、東軍細川勝元と西軍山名宗全とがそれぞれ諸大名をひきいれて京都を中心に対抗した大乱。○**噪動**　「噪動」の用例未確認。「澡　サハグ」（伊京）。○**薄氷を蹈んで**　「薄氷を履むが如し　危険に臨んでいる状態のたとえ」（故事ことわざ辞典）。○**北山**　京都市北区の船岡山。衣笠山・岩倉山などの諸山の称。○**上加茂**　京都市北区、鴨川の上流左岸の地名。○**常盤の古御所**　「上京今宮の北に當りて大源庵と云へる。禪家あり。是昔常盤の住みし処、ときは此処にて牛若丸を誕生せり。常盤井とてこの辺りなり」（『京羽二重』二）、「はぎ野のかたはらなり。かの紫野ノ故御所是なり。今は大源庵とて大徳寺玉室の初住有し寺なり。閣殿の後なんふる井有。そのかみよりの井なりと云伝へき。やまよせなりしに所々ほれば、かならずしも色々のなりしける土器出けり。余此寺へしかしく来とらふし故かかることつぶさにみ侍りき（『洛陽名所集』六）。○**墻**　垣根。または塀。「墻　カキ」（文明本）。○**徒移**　転居。とのうつり。転宅。「移徒　ワタマシ」（諸節用集）。○**賀儀**　がぎ。祝いの儀式。祝い事。○**賓客**　「賓客　ヒンカク」（文明本・書言字考）。○**堂上**　「堂上　ダウシヤウ」（文明本）○**夜半**　子の刻。○**新婦**　既出。巻四―九、四―十。「新婦　ヨメ」（書言字考）。○**挑灯**　「挑灯　チヤウチン」（天正本・明応本）、「挑灯　チョウチン」（饅頭屋本）。○**二行につらね**　二列に並び。○**長持**　衣類、調度などを入れて運搬したり保存したりするための蓋のついた長方形の大きな箱。長櫃。中持。○**挟箱**　近世の武家の公用の外出に際して必要な調度装身具を納めて従者に背負わせた箱。挟竹にかわって用いられるようになった長方形の浅い箱で、ふたに棒を通してかつぐようにしたもの。○**屏風**　折りたたんで移動する室内の障屏具。装飾をかねて風を防ぎ室内の仕切に用いる。○**衣桁**　衣服をかけておく台。鳥居のような形のついたて式のものと、真中から二枚に折れる折りたたみ式とがある。衣架。御衣かけ。ころもざお。「衣桁　イカウ」（文明本）。○**貝桶**　貝あわせの貝を入れる桶。地貝用のものと出貝用のものと二個で一組。中世、嫁入り道具の一つとされた。多くは八角形。印籠蓋、黒塗りに蒔絵を施し、上を紅の紐で結ぶ。○**奇羞**　「羞　シウ」（合類）。○**いかで強ざらん**　強いてすすめずにはおれないの意。○**ふきけしぬ**　風が吹き消したの意。○**こと〳〵敷**　大仰に。○**牡丹花下に猫のねぶれる所かきたる絵**　【余説】参照。○**怪異**　「怪異　ケイ」（合類）。○**村井澄玄**　未詳。○**洽聞**　見聞や知識などが広いこと。「洽聞　カフブン」（文明本）。○**蛙**　「蛙　カイル」（黒本・饅頭・易林本）。○**汙池**　みづたまり。たまりみづの池。○**叢棘**　「むらがり生えているいばら」（大漢和）。○**叟**　「叟　オキナ」（易林本）。○**蜈蚣**　ムカデ（百足）の異名。「蜈蚣　ゴコウ」（合類）、「蜈蚣　ムカデ」（饅頭屋本・易林本）。○**斃れぬ**　「斃　タヲル」（諸節用集）○**卵**　「卵　カイゴ」（易林本）。○**籬槍竹**　未詳。○**鱟醤**　上の用字で振り仮名「かうしやう」の訓みは未確認。「蟹醤」・「蟹醢」「かにびしお」は、「かにひしこ」に同じ。「かにひしこ」は、蟹鰹。塩漬けの蟹。蟹の塩辛。○**溺**　小便。ユバリの転。上の用字で「いばり」の訓み未確認。「尿　イバリ」（文明本）。○**灑て**　「灑　ソソギ」（文明本）

【類話】『稽神録』「田達誠」〈富士2〉

豊かな商人の田達誠の家に、夜中、化け物（ここでは鼠ではなく鬼）

が訪れ、自分の家は欠陥があるため、とめて欲しいと頼む、という前半部分は共通する。だが、後半部分や、家に入れてもらう前に鬼は素性を明かし、断られた経験があることなどは、異なる。

【余説】 沈括の『夢渓筆談』の「書画」に、欧陽修の所蔵する牡丹と猫の古画を、姻戚関係にあった呉育が、猫の目の細さから正午の牡丹を描いたものだと鑑定した話がでている。これは、猫の目の形で時間が分かるとした考えに基づいている。

原雙桂の『過庭紀談』に、「又、世上ニ牡丹ノ下ニ猫ノ眠リ居ル図ヲエガケル多シ」と、述べた後に、前述の呉育の正午の牡丹の話を出し、正午を表す細い眼の猫を描くべきであるとしている。

少し後になるが、享保十六年に清人画家沈南蘋が写実的な画風を日本に伝えた。その影響を受けた画家の作品に、牡丹と眠る猫を描いたものが多く出た。作中の挿絵とも共通するが、牡丹の上を蝶が飛んでいる。この組み合わせも吉祥の表現としてよく用いられている。宝暦二年刊『倭漢節用無双嚢』に、「牡丹花睡猫故事」として、「古語に曰、牡丹花の睡猫は意（こころ）舞蝶に在りと。これ天下佞謀の士をそしりたる詞也」とある。この意を用いた物語が『掃部狼婦物語』で「牡丹睡猫の譬」として紹介されている。本文挿絵でも、猫は薄目をあけて、蝶を見ているようである。上記の影響があるか。

○死後の烈女

＊福嶋角左衛門は生国＊播州＊姫路の者なり。久しくみやづかへもせずして居たりしが、其比＊大閤秀吉の内、＊福嶋左衛門の大夫とはすこし＊旧好あるゆへに、これをたのみしかるべきとりたてにもあひ、奉公せばやとおもひ、故郷を出て都におもむく。＊明石・＊兵庫の浦をへて＊尼か崎に出で、やう〳〵津の国＊高槻のほとりに至りぬれば、しきりに＊のんどかはきぬ。路のかたはらをみるに、ちいさき人家あり。その家たゞ女房一人あり。そのかほかたちのうつくしさまたかゝる＊辺鄙にはあるべきともおもはれず、窓のあかりに向ふて＊襪を縫ふ角左衛門立よりて湯水をこふ。女房やすきほどの事なりと隣の家にはしり行て茶をもらふてあたえぬ。

角左衛門しばし立やすらひ、その家の中を見めぐらすに、＊厨や・かまどの類もなし。角左衛門あやしみて、いかにを火を＊焼事はしたまはずやと問ふ。女房家まづしく身をとろへて、飯を＊炊きてみづから養ふ事かなはず。あたり近き人家にやとわれてその日を送る。まことにかなしき世わたりにて侍ると、語るうちにも襪を縫ふ。そのけしきはなはだ忙しくいとまなき躰と見ゆ。角左衛門その貧困＊辛苦の躰をみてかぎりなくあはれにおぼへ、またそのかほかたちの優にやさしきにみとれて、やゝ傍により手をとりて、かゝる艶なる身をもちて、この辺鄙にまづしく送り給ふこそ＊遺恨なれ。我にしたがひて都にのぼり給へかし。＊よきにはからひたてまつらんと。すこし＊その心を挑みける。

女房＊けしからずふりはなちて＊いらへもせず。やゝありてわれにはさだまれる夫侍り。名を藤内とて布をあきなふ人なり。交易のために他国にいづ。わが身はこゝにとどまりて家をまもり、つゝしんで＊舅＊姑に孝行をつくし、みづから女の＊職事をつとめて、まづしき中にもいかにもして朝暮の養をいたし、＊飢寒におよばざらん事を謀る。今已に十年に及べり。さいわひ明日わが夫かへり来る。はやとく立さり給へといへば、角左衛門大きにそのその＊貞烈を感じ悔＊媿て僕に持せたる＊破籠やうの物をひらき、＊餅・＊果もの取出し、女房にあたへ去りぬ。

その夜は＊山崎に宿しけるが、あくる朝、かの女房の所に＊所要の事かきたる文とりをとしけるゆへ跡へ戻りける所に、道にて＊葬礼にあへり。いかなる人にやとたづぬれば布商人藤内を送るといふ。角左衛門大いにおどろきあやしみて、その葬礼にしたがひて＊墓所にいたれば、すなはち昨日女房にあひし所なり。今みれば家もなく跡もうせ

て、たゞ草＊蕭〻たる野原なり。その地をほり葬る所をみれば、藤内が女房の＊棺あり。棺のうちにあたらしき褪一雙、餅・果ありのまま見ゆ。又そのかたはらに古き塚二つあり。これを問へばすなはちその舅 姑の塚なりと。その年数を問へば十年に及ぶといふ。角左衛門感激にたへず送りし者に右のあらまし語り＊鳥目などくばりあたへて、ともに葬送の儀式を＊資け、かつ跡のとふらひの事まで＊念比にはからひて、その後都へのぼりける。あゝこの女房死すといへども婦道をわすれず、舅姑に孝行をつくして夫をまつ。いはんやその生る時は知りぬべし。かの世の寡婦室女、いやしくもその夫をわすれて再嫁し、或は＊邪僻＊姪乱にして終に媿る、心なきもの多し。この女房の＊風儀をきかば、すこしく戒る所あらんか。

狗はり子巻之七終

元禄五年壬申正月吉日

京東洞院夷川上町

林　九兵衛

同梓

同堀河通高辻上町

伏見屋藤右衛門

○**福嶋角左衛門**　不明。○**播州**　播磨国の別称。○**姫路**　兵庫県北西部の市。古代に播磨国府・国分寺が所在。もと池田輝政の居城地、酒井氏十五万石の城下町。○**大閤秀吉**　豊臣秀吉。天文六年～慶長三年（一五三七～九八）。安土桃山時代の武将。織田信長に仕え、天正十八年（一五九〇）小田原北条氏を降伏させ、ほぼ日本を統一。慶長三年（一五九八）没。○**福嶋左衛門の大夫**　福島正則（一五六一～一六二四）。安土桃山・江戸時代前期の武将。尾張の住人福島市兵衛正信の長男。母は豊臣秀吉の伯母木下氏と伝えられている。幼時より秀吉に仕え、市松と称した。天正六年（一五七八）播磨三木城攻め、同九年因幡鳥取攻め、同十年山崎の戦などに戦功を顕わし、同年九月二十五日播磨神東郡矢野仙分三百石を加増された。秀吉没後の慶長五年（一六〇〇）九月十五日の関ヶ原の合戦では、先陣を勤め、宇喜多秀・島津義弘の軍と戦った。十九日家康の命により京都の警護を担当し、二十三日には大坂に至った。同年十一月安芸・備後二ヵ国四十九万八千二百二十三石の大封を与えられ、広島城主となった。元和五年六月九日、先に広島城を無届けで修築したことを咎められ本丸そのほかことごとく破却すべきことを命じられながら、石垣を少し壊しただけでそのままにしておいたことを責められ、安芸・備後両国を没収され、陸奥津軽への転封を命じられた。しかし、津軽の津軽為信が転封を喜ばず、また七月津軽が遠方であるとの理由で越後魚沼郡の内二万五千石を与えられることになり、信濃高井郡高井野邑に蟄居した。寛永元年（一六二四）七月十三日高井野邑において没した（寛政譜）。○**旧好**　昔のよしみ。古いなじみ。「キウカウ」（易林本）。○**明石**　播磨国明石郡。現在の明石市。○**兵庫の浦**　現在の兵庫県神戸港辺りか。○**尼か崎**　摂津の西部、武庫平野の南端に位置する。永禄一一年に上洛し、三好氏を畿内から追払った織田信長は、翌一二年に矢銭を賦課するために尼崎に軍勢を派遣し、焼討ちを行っている。信長のもとでは荒木村重が摂津一国の支配者となり、尼崎城にはその子村次が配置されていたが、天正六年に村重が謀反を起こすと反信長勢力の本願寺の勢力下に入り、市域北部は村重が籠城する有岡上攻防の戦場となった。（中略）同八年の本願寺の大阪退去まで続いた（『兵庫県の地名』日本歴史地名大系29）。○**高槻**　大阪府の北東部に位置する。高山右近転封後、当市域の大部分は一時秀吉の直轄領となり、富田宿を含めて羽柴小吉秀勝が支配したと思われる（『大阪府の地名』日本歴史地名大系28）。○**のんど**　「喉　ノント」（合類）。○**辺鄙**　「へんひ」（易林本）。○**褪**　用例未確認。「韈　ベツ　屬―也　タビ　足衣」（倭玉篇）。○**厨**　①食物を調理する所。台所。②①で調理したもの。「クリヤ」（倭玉篇）。○**焼**　「タク」（諸節用集）。○**炊き**　飯をたく。その方法は、米を

「こしき」で蒸した。「カシク」（諸節用集）「カシーク」（黒本本）。○**辛苦**　つらいめ。「シンク」（諸節用集）。○**遺恨**　残念に思うこと。思いを残すこと。心残り。遺憾。「イコン」（黒本本）。○**よきにはからう**　「はからう」適切に処置する。取りしきる。取りなす。○**いらへ**　「いらふ」の名詞形。応答。○**心を挑みける**　「挑む」は恋をしかける。言い寄る。関係を迫る。○**けしからず**　①普通の状態から外れていて、異常なほどである。②不都合である。非難すべきさまである。あるまじきことである。いけない。③あやしげである。まともでない。④不思議な。不可解な。○**舅**　「舅　シウト」（合類）。○**姑**　「姑　シウトメ」（合類）。○**職事**　用例未確認。○**飢寒**　飢えと寒さ。苦しみが来ないように考えている。「Qican」（日葡）。「キカン」（易林本）。○**貞烈**　貞節のはげしいこと。○**魄**　はぢる（大漢和）。○**破籠**　既出。巻一―三。食物などを入れる木製の蓋付きの容器またその器に入れた食物をいうこともある。○**餅**　「餅　モチイ」（倭玉篇）。○**果**　間食や酒の肴として食べる食物。木の実に限らず広くいう。「果　クダモノ」（倭玉篇）。○**山崎**　桂川・宇治川・木津川が合流して淀川となり、川は天王山と男山の隘路部を通って山城盆地から大阪平野に出るが、その北側、天王山とその北・東・南山麓に位置する。古代以来、交通の要地（『京都府の地名』日本歴史地名大系26）。○**所要**　必要なこと。必要なもの。○**葬礼**　「葬礼　サウレイ」（伊京本・饅頭屋本）。○**墓所**　巻六―五では、上の用字で振り仮名「むしよ」とある。「はかしよ」の用例は未確認。○**蕭々**　ものさびしいさま。「蕭々　ショウシヨウ」（合類）。○**棺**　「棺　クワン」（諸節用集）。○**鳥目**　「鳥目　テウモク　銭異名也」（伊京集）。○**資け**　「資　タスク」（倭玉篇）。○**念比**　「念比　ネンゴロ」（易林本）。○**寡婦**　漢語。夫に死別した女。やもめ。○**邪僻婬乱**　「邪僻」は根性のひねくれ曲がっていること。「婬乱」は色事に荒ぶ。○**風儀**　①風俗。風習。②行儀。作法。③容姿。風采。服装の身なり。

【出典】『続玄怪録』「唐儉」〈富士3〉

【余説】唐儉が若い時、驢馬に乗って呉楚に行った。洛城を過ぎた頃に喉が渇き、路傍を見ると小屋があって、年二十余の婦人がおり、明かりに向かって襪を縫っていた。飲み物を求めると、逡巡して、一つの器を持ってきた。室内を眺めると厨・竈が無く、聞いてみると、「貧しくて炊くものが無い。近くに食べ物をもとめるのだ」と言う。そして言い終わると、また襪を縫い始めた。忙しそうなので、どうしてかと聞いてみると、「私の夫薛良は貧しい商人で、十余年帰ってこないので、明日早くに迎えに来る。そのために忙しいのである」と答えた。儉は言い寄るが拒んで答えないので恥じて謝し、餅両軸を置いて去った。翌朝、都を出ようとした所で葬礼に出会い、それが昨日出会った夫人の夫のものである事を知る。これについて行き、その墓所に至ると、そこが飲み物を求めた場所であった。そして墓所を発くと、棺の上には餅両軸と新しい襪は一雙乗っていた。ここを去り、舟で揚州禪智寺に至るとそれぞれに徒を連れた二人の志子がおり、墓を発いたところ、十年前に葬った息の棺の中に、婦人の履が一雙あった。また一年前に葬った寵を受けた姫の棺には、丈夫の履が一雙あった。これを取って合わせると対になった（『太平広記』三二七「唐儉」本文末部に「出続玄怪録」とある）。

人物名の変更と夫の仕事が明記されるか否かの細部の違いはあるが、「唐儉」の前半部分と大筋は同じである。しかし、「唐儉」の後半部分は省かれており、『狗張子』では、女性に対する感想が述べられている。